松山市文化財調査報告書89

松ヶ谷遺跡

ー農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2003

松山市教育委員会

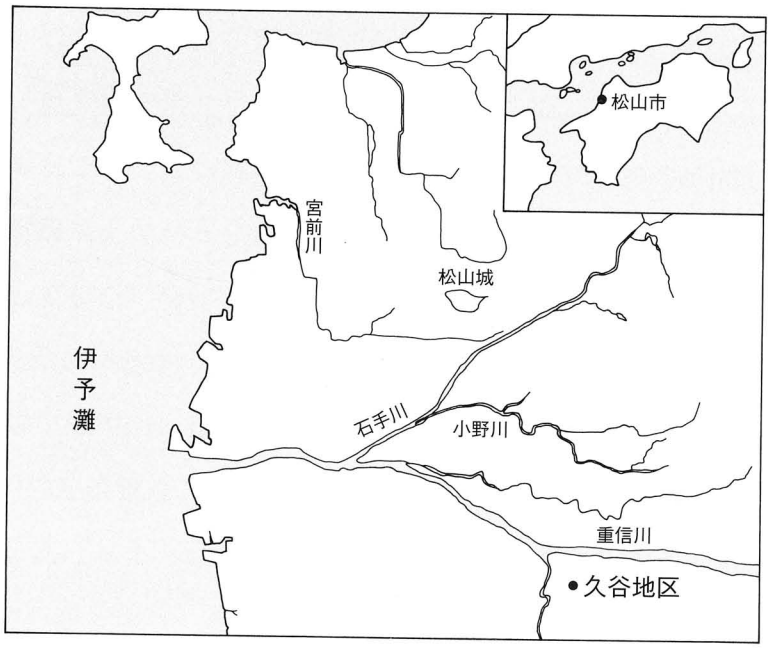
財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松ケ谷遺跡

（まつがたに）

－農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－



2003

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

序

石鎚山系に源を発し、松山平野の南部を西流する重信川、その支流となる御坂川下流域の肥沃な農耕地に久谷地区は広がります。

調査地周辺の御坂川と砥部川に挟まれた大友山からのびる丘陵上には、弥生時代の高地性遺跡である釈迦面山遺跡、古墳時代の横穴式石室構造をもつ松ヶ谷古墳や古鎌山古墳群、丘陵裾部には西野大池窯跡群や古鎌山窯跡群の須恵器窯、平野部には市指定史跡「八ツ塚古墳群」などの群集古墳、中世になると県指定史跡「荏原城跡」をはじめとした戦国武将の居館など、丘陵部から平野部にかけて遺跡の密集する地域であります。

松ヶ谷遺跡は丘陵上に立地し、松山平野の東部から西部一帯、遠くには伊予灘を一望できます。発掘調査では、この眺望豊かな丘陵上に築かれた弥生時代後期の竪穴式住居址やそれに伴う遺構が見つかり、住居址内からは、弥生土器や石器など当時の生活が窺える遺物も出土しました。特に、この遺跡は立地から察して、弥生時代の中頃から瀬戸内海沿岸地域で急激に増加する高地性遺跡であり、『魏志』の「倭人伝」に記される倭国大乱に伴う軍事的な様相或いは、山へ生活の依存を高めた様相など、調査例の少ない高地性遺跡研究における貴重な資料を得ることができました。

こうした成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成15年３月７日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成12年10月～同年12月に松山市恵原町内において愛媛県松山地方局産業経済部第２土地改良課の「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事」に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰとした。

3．遺物の実測・製図及び遺構の製図は、担当調査員の指示のもと、宮脇和人、猪野美喜子、安井由起美が行った。

4．遺物の実測図は、土製品を1／4・1／3、石製品については1／4・1／3・2／3を基本とした。

5．遺構図や遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位は真北である。

7．本書にかかる遺物・記録類は、松山市埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

8．遺物の撮影及び写真図版の作成は大西朋子が行った。

9．屋外調査においては、森光晴氏から御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

10．本書の執筆は、河野史知、加島次郎が分担執筆し、編集は河野史知が行った。なお、編集と校正は、梅木謙一、水口あをい、猪野美喜子、安井由起美の協力を得た。

11．製版　白黒図版－133線
　　印刷　オフセット印刷
　　用紙　本文－マットカラー110kg
　　白黒写真図版－マットカラー135kg
　　製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯　　２．調査・刊行組織

第２章　遺跡の環境 …… 3
　１．遺跡の立地　　２．歴史的環境

第３章　試掘調査 …… 6
　１．経　過　　２．調　査　　３．調査の結果

第４章　調査の概要 …… 15
　１．調査の経過　　２．層　位

第５章　Ａ区の調査 …… 23
　１．検出遺構　　２．第Ⅳ層出土遺物

第６章　Ｂ区の調査 …… 25
　１．検出遺構　　２．出土遺物

第７章　調査の成果と課題 …… 35
　１．土　層　　２．遺　構　　３．松ヶ谷古墳群内で確認した石室
　４．西野町試掘調査の出土遺物　　５．西野古墳群内の採取遺物　　６．まとめ

挿　図　目　次

第１図　松山平野の地形分類図（縮尺1／200,000）…… 3
第２図　周辺の遺跡分布図（縮尺1／25,000）…… 5
第３図　調査地位置図（１）（縮尺1／5,000）…… 7
第４図　調査地位置図（２）（縮尺1／600）…… 8
第５図　トレンチ配置図（縮尺1／400）…… 9
第６図　トレンチ柱状図（１）（縮尺1／40）…… 12
第７図　トレンチ柱状図（２）（縮尺1／40）…… 13
第８図　トレンチ柱状図（３）（縮尺1／40）…… 14
第９図　調査地位置図（縮尺1／800）…… 15
第10図　調査地区割図（縮尺1／500）…… 16
第11図　Ａ区土層図（縮尺1／50）…… 17
第12図　Ｂ区土層図（縮尺1／50）…… 19
第13図　Ａ・Ｂ区遺構配置図（縮尺1／100）…… 21
第14図　Ａ区ＳＤ１測量図（縮尺1／80）…… 23
第15図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）…… 24
第16図　ＳＢ１測量図（１）（縮尺1／50）…… 25
第17図　ＳＢ１測量図（２）（縮尺1／60）…… 26
第18図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺1／4・1／3）…… 27
第19図　ＳＫ１測量図（縮尺1／20）…… 28
第20図　ＳＫ２測量図（縮尺1／20）…… 28
第21図　ＳＫ３測量図（縮尺1／20）…… 29
第22図　ＳＫ４測量図（縮尺1／20）…… 29
第23図　ＳＫ５測量図（縮尺1／20）…… 30
第24図　ＳＫ６測量図（縮尺1／20）…… 30
第25図　ＳＰ１測量図（縮尺1／20）…… 31
第26図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1／4・2／3）…… 31
第27図　第Ⅰ層出土遺物実測図（縮尺1／4）…… 31
第28図　表採遺物実測図（縮尺1／3）…… 32
第29図　位置図（１）（縮尺1／3,000）…… 36
第30図　位置図（２）（縮尺1／200）…… 37
第31図　Ｂ地点現況図（縮尺1／60）…… 38
第32図　Ｃ地点現況図（縮尺1／30）…… 39
第33図　トレンチ配置図（縮尺1／500）…… 40
第34図　Ｔ５～Ｔ８土層断面図（縮尺1／80）…… 41
第35図　第９層出土遺物実測図（縮尺1／4）…… 42
第36図　位置図（縮尺1／7,000）…… 44

第37図　採取遺物実測図（１）（縮尺1／3）…… 46
第38図　採取遺物実測図（２）（縮尺1／3）…… 47

表　目　次

表１　竪穴式住居址一覧 …… 33
表２　溝一覧 …… 33
表３　土坑一覧 …… 33
表４　Ａ区第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）…… 33
表５　Ｂ区ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）…… 33
表６　Ｂ区ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）…… 34
表７　Ｂ区第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）…… 34
表８　Ｂ区第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）…… 34
表９　第Ｉ層出土遺物観察表（土製品）…… 34
表10　表採出土遺物観察表（石製品）…… 34
表11　第９層出土遺物観察表（土製品）…… 43
表12　採取遺物観察表（土製品）…… 48

写 真 図 版 目 次

図版１．１　調査地遠景（北東より）
　　２　調査地全景（南より）
図版２．１　調査地全景（北より）
　　２　作業状況（北より）
図版３．１　Ａ区遺構検出状況（南より）
　　２　Ａ区遺構検出状況（北より）
図版４．１　Ａ区ＳＤ１南壁土層（北より）
　　２　Ａ区台石出土状況（東より）
図版５．１　Ａ区遺構完掘状況（北より）
　　２　Ａ区遺構完掘状況（南より）
図版６．１　Ｂ区遺構検出状況（南より）
　　２　Ｂ区ＳＫ４検出状況（東より）
図版７．１　Ｂ区ＳＫ１・６検出状況（東より）
　　２　Ｂ区ＳＢ１検出状況（西より）

図版８．１　Ｂ区ＳＢ１ベルト土層（北より）
　　２　Ｂ区ＳＢ１焼土・炭検出状況（北西より）
図版９．１　Ｂ区ＳＢ１遺物出土状況（東より）
　　２　Ｂ区ＳＢ１完掘状況（西より）
図版10．１　Ｂ区ＳＢ１完掘状況（東より）
　　２　調査地全景（東より）
図版11．１　Ａ区第Ⅳ層出土遺物
　　２　Ｂ区第Ⅳ層出土遺物
　　３　Ｂ区第Ⅰ層出土遺物
図版12．１　Ｂ区ＳＢ１出土遺物
図版13．１　松ヶ谷古墳群の遠景（北西より）
　　２　松ヶ谷古墳群内Ａ地点の石（北より）
図版14．１　松ヶ谷古墳群内Ａ地点の石（北西より）
　　２　松ヶ谷古墳群内Ｂ地点の石（南西より）
図版15．１　松ヶ谷古墳群内Ｃ地点の石（北より）
　　２　松ヶ谷古墳群内Ｃ地点の石（南西より）
図版16．１　須恵器の採取地（北東より）
　　２　表採遺物（東より）

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

2000（平成12）年３月、愛媛県松山地方局産業経済部第２土地改良課（以下、松山地方局）より、松山市恵原町乙190外における「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事」にあたり、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.140 松ヶ谷古墳群、松ヶ谷遺物包含地』内にあり、周知の遺跡として知られている。申請地の北西1.2㎞には西野Ⅲ遺跡があり、弥生時代前期の土壙墓、弥生時代中期の竪穴式住居址や掘立柱建物址、多数の土壙墓が確認されている。西野Ⅲ遺跡の西150ｍにある釈迦面山遺跡では、丘陵頂上部に弥生時代中・後期の竪穴式住居址５棟と倉庫跡１棟が検出され、集落が形成されている。西1.3㎞には横穴式石室構造をもつ大下田古墳群。北0.7㎞には八ツ塚古墳群が分布する。また、西１㎞の古鎌山一帯には、谷田窯跡群、古鎌山窯跡群、通谷窯跡群、西野大池窯跡群などがあり、６世紀中葉から７世紀初頭にかけての窯跡が11基ある。北約100ｍの丘陵尾根部には松ヶ谷古墳があり、同古墳からは後期の横穴式石室を検出し、石室内からは多数の須恵器を主体とした土器が出土している。このように申請地一帯には、多数の遺跡が存在する。

このことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、2000（平成12）年４月17日～５月31日に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。試掘調査は、調査地内の尾根部を中心にしてＴ１～Ｔ16の計16本トレンチを設定し、古墳や集落の確認と堆積土層の確認を行った。

試掘調査の結果、Ｔ１～Ｔ４からは溝状遺構１条、Ｔ10・Ｔ12～Ｔ14からは土坑状遺構数基、炭・焼土を検出し、弥生土器・石器等が出土した。

これらの結果を受け、文化教育課・埋文センターと松山地方局は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代における高地性遺跡の構造解明を調査の主目的とし、文化教育課の指導のもと、埋文センターが主体となり、2000（平成12）年10月10日より本格調査を実施した。

なお、本格調査は溝状遺構を検出した範囲をＡ区とし、土坑状遺構と炭・焼土を検出した範囲をＢ区と称した。

2．調査・刊行組織

調査地　松山市恵原町乙190･191･192･197番地
遺跡名　松ヶ谷遺跡
調査期間　平成12年10月10日～同年12月８日
調査面積　4,623㎡のうち1,036㎡
調査委託　愛媛県松山地方局産業経済部第２土地改良課

【調査組織】（平成12年度）

松山市教育委員会	教育長	中矢陽三
事務局	局長	團上和敬
	局長付参事	森脇將
	次長	赤星忠男
文化教育課	課長	馬場洋
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	二宮正昌
	事務局次長	江戸孝
	事務局次長	森和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川隆
	専門監	野本力
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	調査員	河野史知
		加島次郎

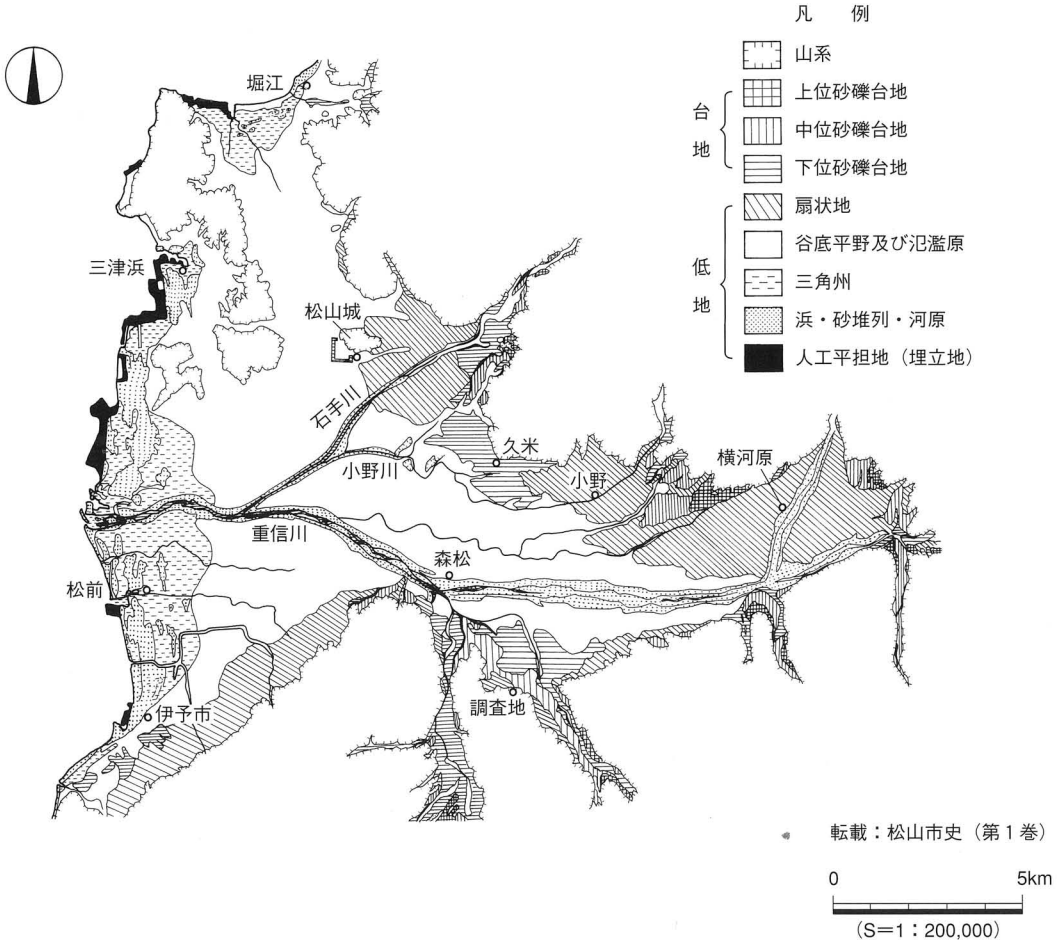
【刊行組織】（平成14年度）（平成15年３月７日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢陽三
事務局	局長	武井正浩
	企画官	川口岸雄
	企画官	石丸修
文化財課	課長	馬場洋
	主幹	八木方人
	副主幹	田城武志
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	三宅泰生
	事務局次長	菅嘉見
	事務局次長	森和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川隆
	専門監	野本力
	次長兼調査係長	西尾幸則
	調査員	河野史知
		加島次郎
		大西朋子

第2章　遺 跡 の 環 境

1．遺跡の立地（第1図）

本遺跡は、松山平野南部を西流する重信川の左岸約3㎞に位置しており、松山市と砥部町の境付近にあたる。本遺跡の南約3㎞付近に、大断層である中央構造線が四国の北部をほぼ東西方向に走っており、それを境にして南の南西日本外帯（太平洋側）と、北の南西日本内帯（アジア大陸側）に区分される。南西日本外帯は安山岩や結晶片岩類などの火山性の岩石で構成されており、南西日本内帯は砂岩と頁岩の互層である和泉層群で構成される。本遺跡は、この南西日本内帯上の丘陵尾根部の標高130m前後に立地している。



第1図　松山平野の地形分類図

2．歴史的環境（第2図）

調査地周辺の砥部川や御坂川下流は県内でも屈指の遺跡の密集する地域で、愛媛県立総合運動公園、とべ動物園の建設や、大規模な住宅開発、道路建設に伴う発掘調査により、多くの成果を得ている。

〔1〕旧石器時代

洪積世の段丘上にある土壇原Ⅴ遺跡から、国府型ナイフ形石器が出土している。

〔2〕縄文時代

早期の土壇原Ⅱ遺跡では、方形の竪穴式住居址内から無文土器が出土する。上野遺跡は前期と後期の重複遺跡で、北西の低丘陵上の谷田Ⅱ遺跡では、後期の竪穴式住居や貯蔵穴とみられる土坑を検出している。北西方の砥部川左岸河岸段丘上の長田遺跡でも土壙群を検出している。これらのことから、縄文時代を通じて集落の存在が窺える。

〔3〕弥生時代

前期の集落跡は未検出であるが、墳墓は多く検出されており、西野Ⅲ遺跡は土壙墓群を主とした大規模な墓域が形成され、墓制を考える上で貴重な資料が検出されている。中期になると、西野Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ遺跡・釈迦面山遺跡・谷田Ⅲ・Ⅳ遺跡などの集落が高位の河岸段丘上で営まれる。後期になると集落は、中位から低位にかけての河岸段丘上にも広がりをみせる。なかでも、北西方に展開する土壇原遺跡群では、土壇原XⅡ（土壇原南）遺跡は竪穴式住居址や掘立柱建物址で構成される大規模な集落で、土壇原Ⅵ（土壇原北）遺跡は土壙墓群を主体となす墓域である。

〔4〕古墳時代

前期から中期の集落跡は不明であるが、後期には高尾田遺跡・水満田・三角・麻生小学校南遺跡から竪穴式住居址や掘立柱建物址などの集落跡がみられる。古墳は前期のものは不明であり、中期には、低位の河岸段丘上に、捩文鏡が出土した三角1号墳、割竹形木棺や箱式石棺などを主体部にもつ土壇原Ⅰ遺跡、円筒埴輪棺の土壇原Ⅴ遺跡などがある。後期になると丘陵上、丘陵裾部、河岸段丘上に古墳は分布し、砥部川の左岸や右岸、御坂川流域などに古墳が密集しており、釈迦面山古墳群・大下田古墳群・古鎌山古墳群・土壇原古墳群・八ツ塚古墳群・松ヶ谷古墳群がある。

松山市と砥部町の隣接部には、砥部古窯跡群があり、6世紀中葉から7世紀にかけての大窯業地域である。砥部川右岸の高位段丘上や低丘陵裾部では、18基の須恵器窯が確認されている。なかでも谷田1～5号窯跡と通谷池1・2号窯跡は埴輪併用窯である。また、谷田1号窯や西野春日谷遺跡では窯跡と住居跡など、工人集団との関わりをもつ遺構を検出している。

〔5〕古代

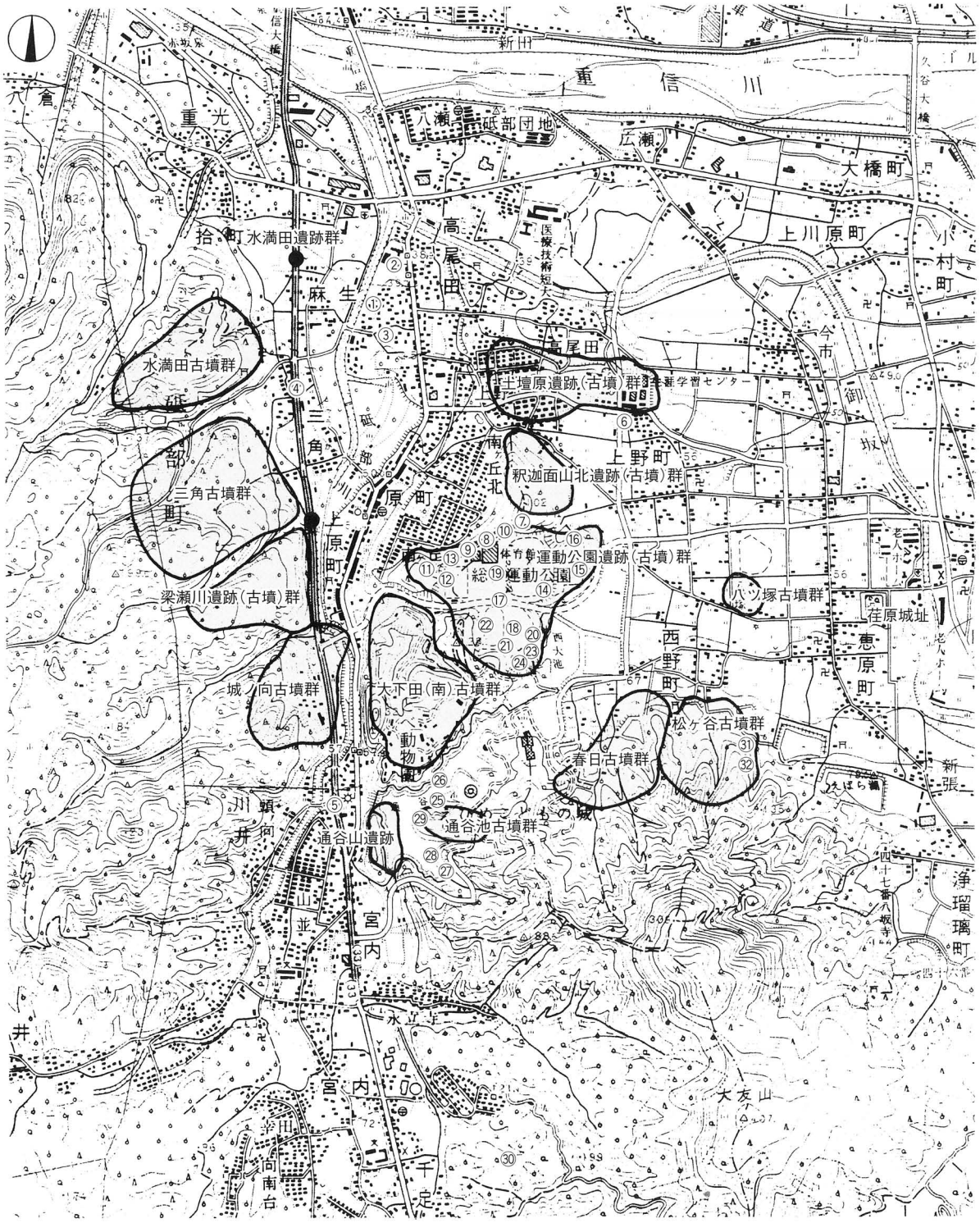
ひきつづき窯が形成される。砥部川右岸の通谷池4号窯跡、千足1号窯跡は8世紀前半である。

〔6〕中世

城跡が多く分布しており、県指定史跡の荏原城を中心にして、荏原城の南西約1.6kmの山頂に大友城、南0.7kmには本陣城としての新張城があり、東2.8kmの尉の城はその山城で狼煙遺構がある。北西1.3kmの上野城は河岸段丘と舌状の丘陵台地の隅部を利用して造られた方形館跡である。荏原城は方形館跡で周囲に郭外に濠を巡らし、濠の土砂をかき揚げた土塁を築いている。

〔7〕近世

隣接する砥部町内では、江戸時代中期からの創業である「砥部焼き」が盛んで、現在も多数の窯がある。



①麻生小学校南遺跡　②高尾田遺跡Ⅰ・Ⅱ　③高尾田遺跡Ⅲ　④三角遺跡Ⅰ～Ⅲ　⑤宮内大畑遺跡
⑥上野遺跡　⑦釈迦面山遺跡　⑧釈迦面山南遺跡　⑨釈迦面山１号古墳　⑩釈迦面山２号古墳
⑪大下田３号古墳　⑫大下田４号古墳　⑬大下田５号古墳　⑭西野Ⅰ遺跡　⑮西野Ⅱ遺跡
⑯西野Ⅲ遺跡　⑰谷田Ⅰ遺跡　⑱谷田Ⅱ遺跡　⑲谷田Ⅲ遺跡　⑳谷田Ⅳ遺跡
㉑谷田Ⅴ遺跡　㉒谷田Ⅵ遺跡　㉓谷田古墳　㉔古鎌山古墳群　㉕通谷池１号窯跡
㉖通谷池２号窯跡　㉗通谷池３号窯跡　㉘通谷池４号窯跡　㉙通谷池２号古墳　㉚千足１号窯跡
㉛松ヶ谷古墳　㉜松ヶ谷遺跡
（S＝1：25,000）

第２図　周辺の遺跡分布図

第3章　試 掘 調 査

1．経過（第3～5図）

平成12年4月～5月に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが試掘調査を行った。試掘調査は、調査地内に16本のトレンチを設定し、遺構や遺物の有無を確認した。

平成12年4月24日、調査区16ヶ所を設定し、T1～T16まで順次調査を開始する。

本日より現場作業を開始する。調査地の伐採・草刈り後の木や草の除去作業を行う。4月27日、南北にトレンチを設定し、トレンチ掘りを人力にて開始する。5月17日、トレンチ掘りに並行して、測量作業を開始する。5月18日、南北トレンチ掘りを終了する。東西トレンチを設定し、北側からトレンチ掘りを開始する。5月23日、トレンチ掘りを終了する。5月24日、トレンチの完掘状況の写真撮影を行う。調査地谷部の積石部分の検出作業を開始する。5月25日、積石部分の写真撮影を行う。5月31日、測量が終了し、調査を完了する。

2．調査

(1)　土層（第6～8図）

T1～T16の検出土層は、1～9層に分層した。1層茶褐色土、2層明黄褐色土、3層黄褐色土、4層黄色土、5層明灰黄色土、6層褐灰色土、7層灰白色土、8層黄橙色土、9層明黄色土となる。

1層：表土で厚さ11～30cmを測る。調査区全域で検出する。

2層：1cm大の礫を含む明黄褐色土で、厚さ4～60cmを測る。調査区の北端を除く尾根部付近にあり、B～G・I～O・Q～T・Z・Cで検出する。

3層：黄褐色土で、厚さ9～99cmを測る。調査区の北端を除く尾根部付近にあり、A・D・E・N～Q・S～X・a～c地点で検出する。

4層：黄色土で、厚さ8～50cmを測る。調査区の北端を除く尾根部にあり、M～R・T・X・Y・a・bで検出する。

5層：明灰黄色土に2～3cm大の礫を多含し、厚さ34～77cmを測る。なお、この土層は、本格調査の結果、SD1の埋土になった。

6層：褐灰色土で、厚さ7～28cmを測る。調査区の南端を除く尾根部にあり、M～R地点で検出する。

7層：灰白色土に3～4cm大の礫を多含し、厚さ15～28cmを測る。調査区の南端を除く尾根部にあり、O・Q地点で検出する。

8層：弥生土器を包含し、厚さ4～22cmを測る。調査区北側の尾根部の比較的平坦地のT10・T12～T14で部分的に検出する。

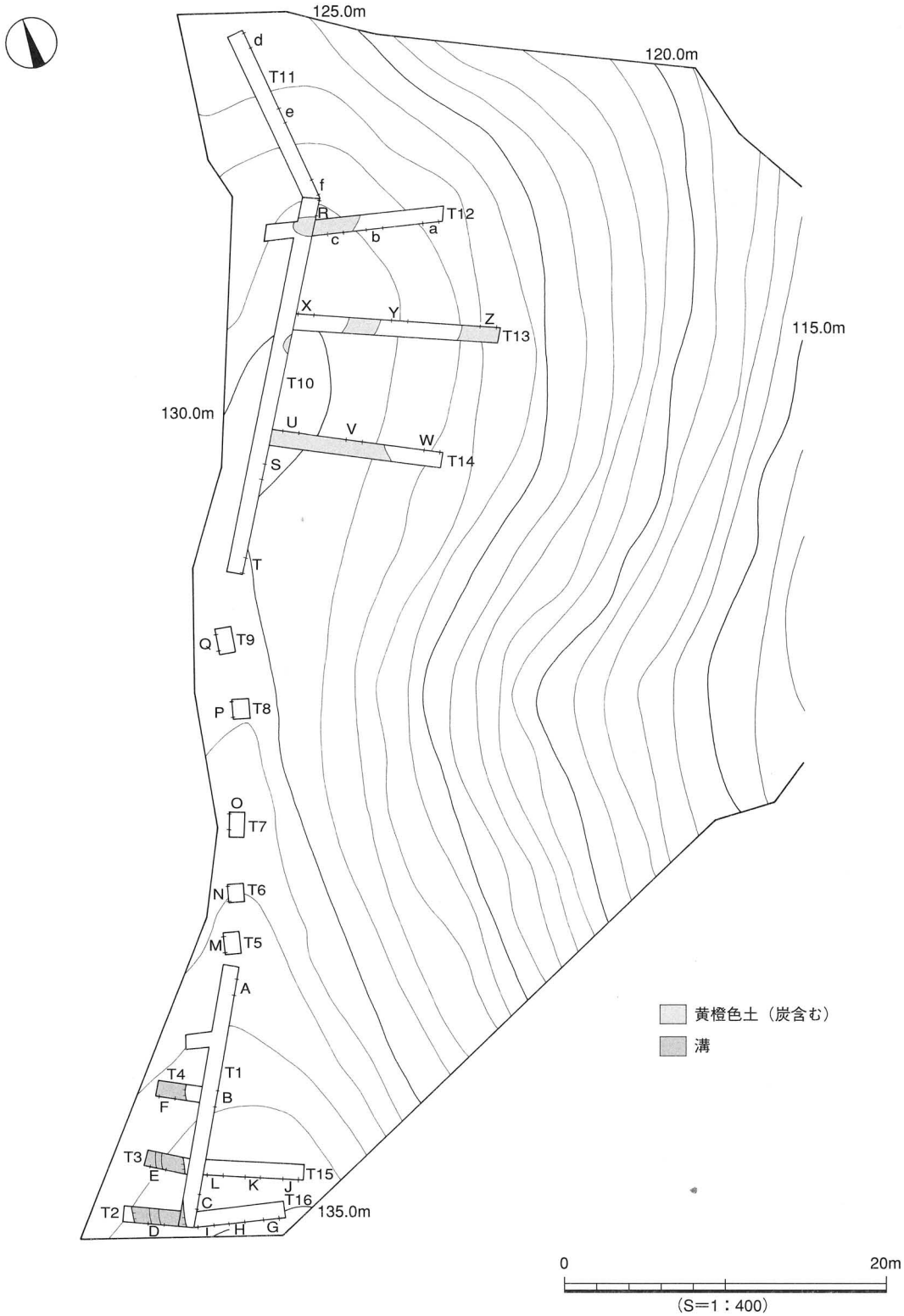
9層：明黄色土の地山であり、調査区の南北端は岩盤となる。

(S=1：5,000)

第3図　調査地位置図（1）

120.0m
110.0m
100.0m
90.0m
積石 1
積石 2
試掘トレンチ
申 請 地
110.0m
120.0m
130.0m
0
20m
(S=1：600)

第 4 図　調査地位置図（2）


125.0m
120.0m
115.0m
130.0m
135.0m
T11
T12
T13
T14
T10
T9
T8
T7
T6
T5
T1
T2
T3
T4
T15
T16
黄橙色土（炭含む）
溝
0
20m
(S=1：400)

第５図　トレンチ配置図

(2) トレンチ調査

Ｔ１（第６図・Ａ～Ｃ）

調査区南端の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ16.8ｍ、深さ12～45㎝、高低差3.24ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構は９層上面にてＳＤ１の肩部を検出した。遺物はない。

Ｔ２（第６図・Ｄ）

調査区南端の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ3.6ｍ、深さ46～143㎝、高低差0.68ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構は９層上面にてＳＤ１を検出した。遺物はない。

Ｔ３（第６図・Ｅ）

調査区南側の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ2.8ｍ、深さ28～105㎝、高低差0.98ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構は９層上面にてＳＤ１を検出した。遺物はない。

Ｔ４（第６図・Ｆ）

調査区南側の西側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ2.8ｍ、深さ18～73㎝、高低差0.81ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構は９層上面にてＳＤ１を検出した。遺物はない。

Ｔ５（第７図・Ｍ）

調査区南側の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ1.4ｍ、深さ1.12ｍ、高低差0.08ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、９層地山である。遺構と遺物はない。

Ｔ６（第７図・Ｎ）

調査区南側の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ1.2ｍ、深さ1.53ｍ、高低差0.01ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、９層地山である。遺構と遺物はない。

Ｔ７（第７図・Ｏ）

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ1.6ｍ、深さ1.69ｍ、高低差0.17ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、７層灰白色土、９層地山である。遺構と遺物はない。

Ｔ８（第７図・Ｐ）

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ1.2ｍ、深さ1.72ｍ、高低差0.09ｍを測る。検出土層は１層表土、３層黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、９層地山である。遺構と遺物はない。

Ｔ９（第７図・Ｑ）

調査区中央の尾根部に設定する。トレンチの規模は、幅１ｍ、長さ1.7ｍ、深さ1.27ｍ、高低差0.02ｍを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、７層灰白色土、９層地山である。遺構と遺物はない。

T10（第７図・R～T）

調査区中央から北側の尾根部にかけて設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ24.0m、深さ8～90㎝、高低差1.58mを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、６層褐灰色土、９層地山である。トレンチ中央部で土坑、北端で焼土層を検出する。遺物はない。

T11（第８図・d～f）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ11.6m、深さ7～50㎝、高低差2.31mを測る。検出土層は１層表土、９層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

T12（第８図・a～c）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ8.2m、深さ27～65㎝、高低差1.28mを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、８層黄橙色土、９層地山である。トレンチ西側（c）の９層上面に炭が混じる焼土層を検出し、第８層中から弥生土器片・石器が出土した。

T13（第８図・X～Z）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ12.9m、深さ13～42㎝、高低差2.82mを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、３層黄褐色土、４層黄色土、８層黄橙色土、９層地山である。９層上面で８層が埋土の土坑状遺構を検出する。

T14（第８図・U～W）

調査区北側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ10.8m、深さ12～37㎝、高低差2.18mを測る。検出土層は１層表土、３層黄褐色土、８層黄橙色土、９層地山である。

T15（第６図・J～L）

調査区南側の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ6.2m、深さ20～40㎝、高低差1.21mを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

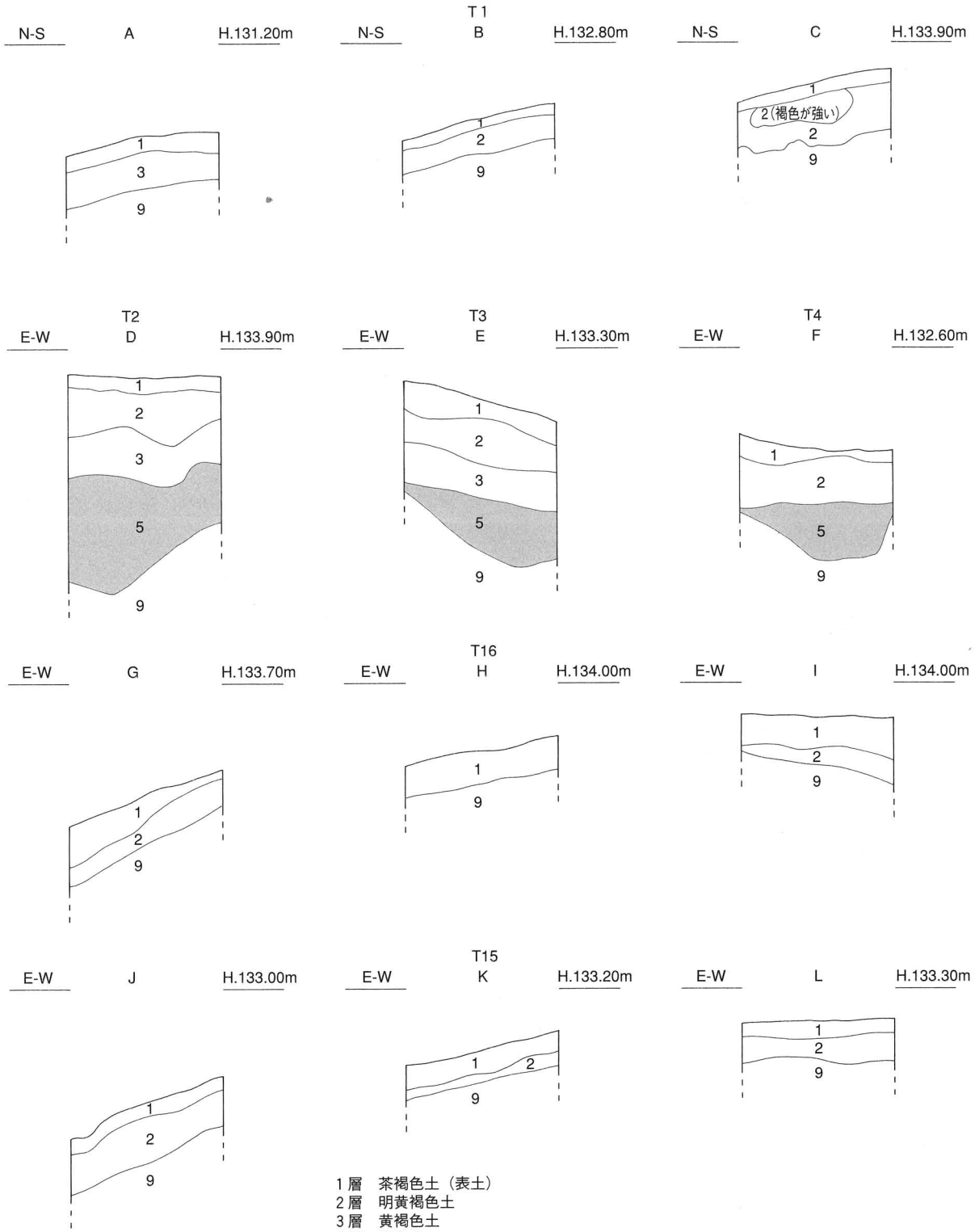
T16（第６図・G～I）

調査区南端の東側斜面に設定する。トレンチの規模は、幅１m、長さ5.7m、深さ22～43㎝、高低差1.19mを測る。検出土層は１層表土、２層明黄褐色土、９層岩盤の地山である。遺構と遺物はない。

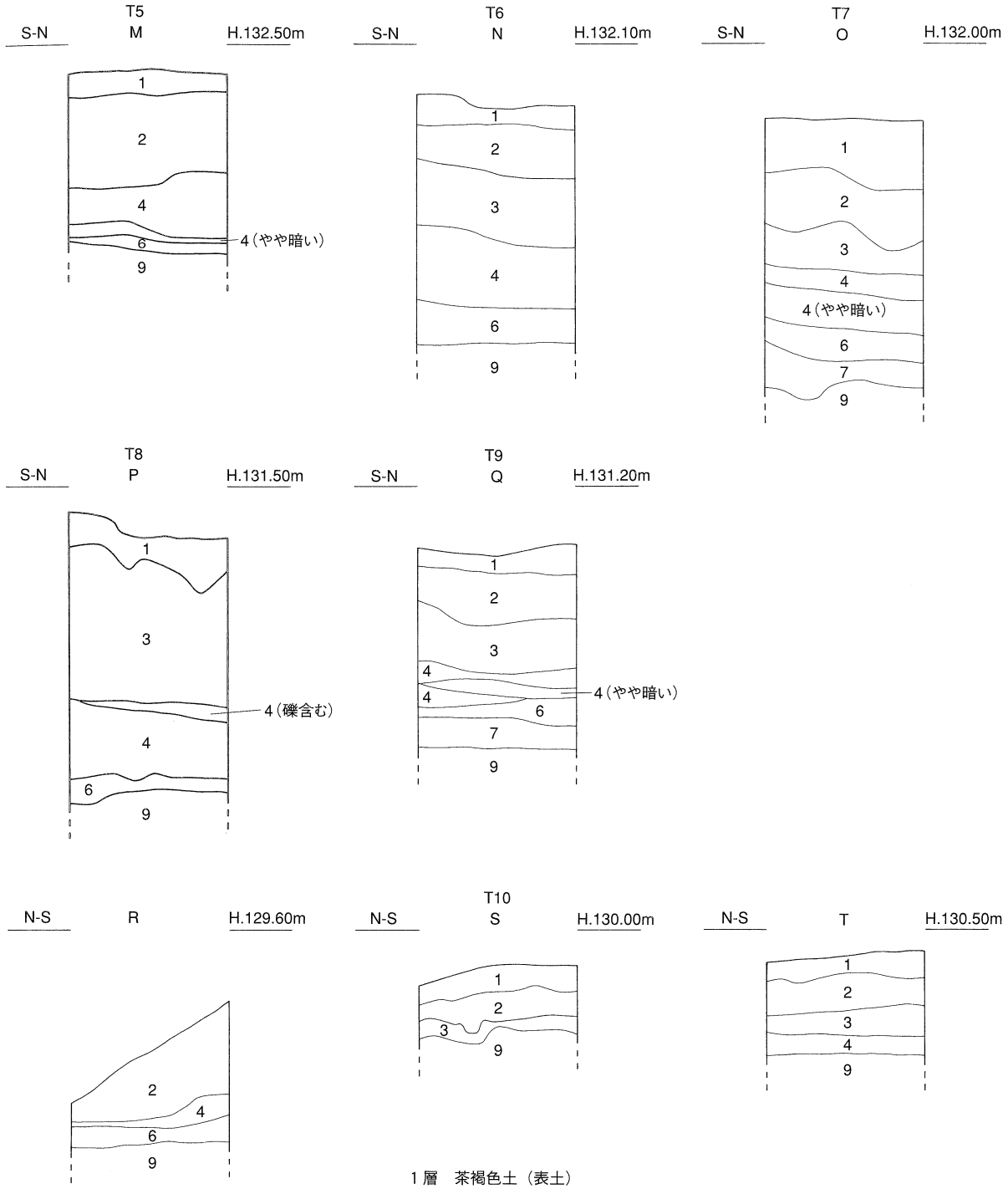
３．調査の結果

試掘調査の結果、T１～T４から尾根に沿う様に断面形状がV字状を呈した溝を検出した。また、T10・T13から土坑を検出し、T10・T12から焼土層や石器を検出し、T14から弥生土器が出土する遺物包含層を検出した。したがって、調査区南端のT１～T４付近と北側のT10～T14付近の２ヶ所を本格調査の対象地とした。

また、対象地の裾部で検出した積石１は人頭大の円礫で、果樹園の裾部の土止めの積石である。積石２は土止め用の予備として置いているものと考えられるが、積石１と積石２は石の形状や材質が比較的揃っていることから、開墾に伴い壊された古墳の石室の石であった可能性も考えられる。



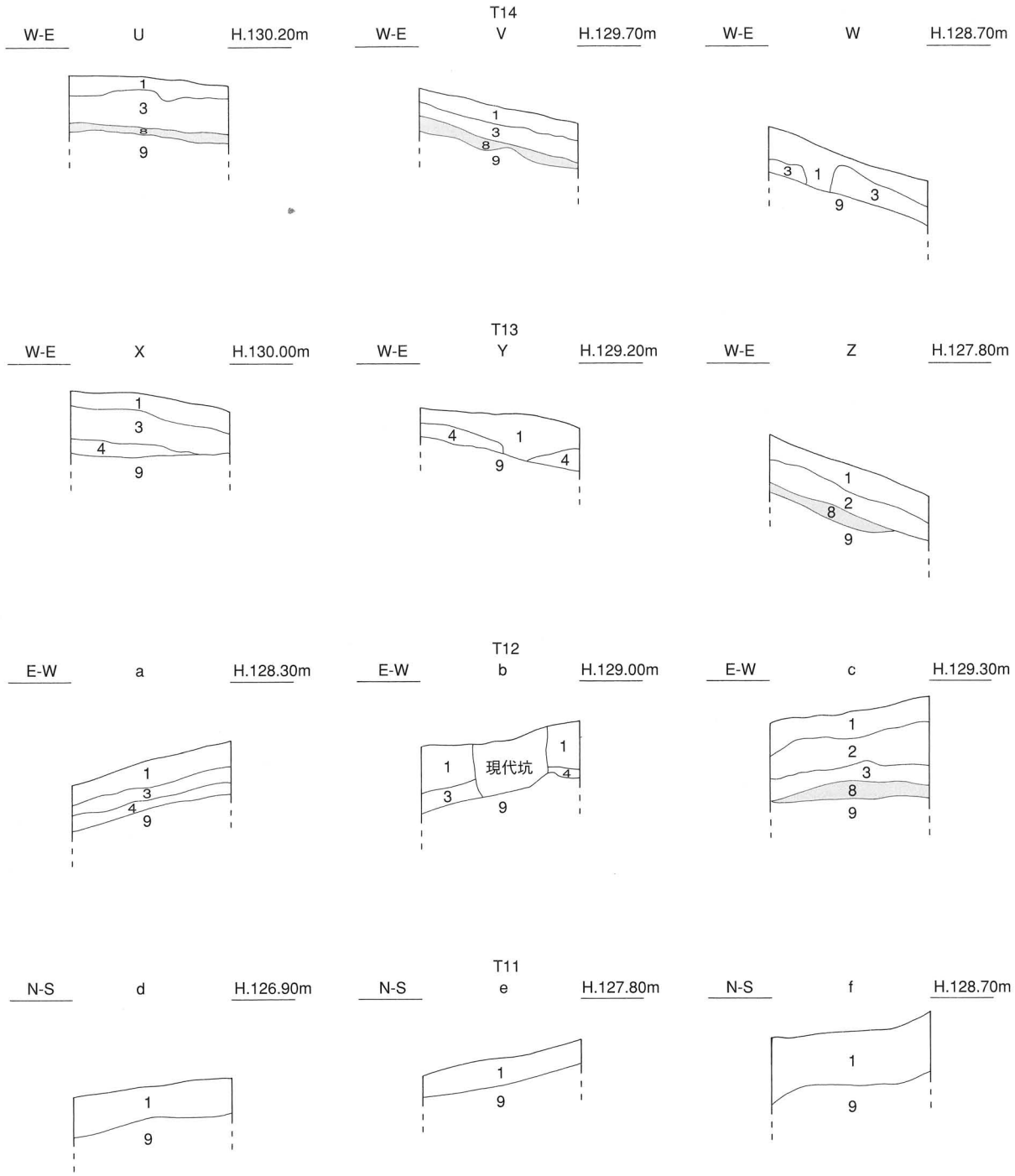
第6図　トレンチ柱状図（1）



1 層　茶褐色土（表土）
2 層　明黄褐色土
3 層　黄褐色土
4 層　黄色土
5 層　明灰黄色土（溝埋土）
6 層　褐灰色土
7 層　灰白色土
8 層　黄橙色土（包含層）
9 層　明黄色土（地山）

0　1m
（S=1：40）

第７図　トレンチ柱状図（2）



1層　茶褐色土（表土）
2層　明黄褐色土
3層　黄褐色土
4層　黄色土
5層　明灰黄色土（溝埋土）
6層　褐灰色土
7層　灰白色土
8層　黄橙色土（包含層）
9層　明黄色土（地山）

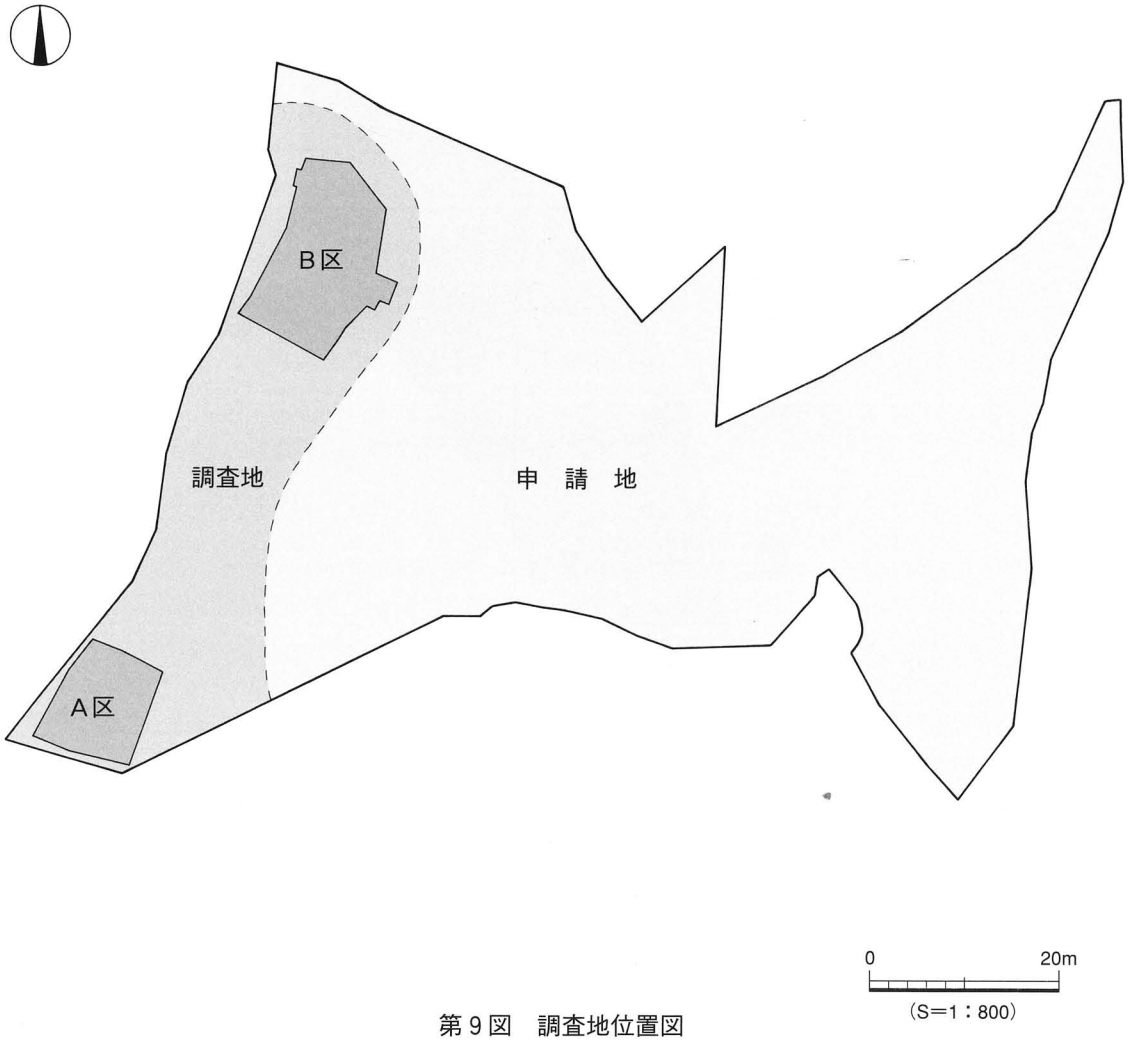
0　1m
（S=1：40）

第8図　トレンチ柱状図（3）

第4章　調 査 の 概 要

1．調査の経過（第９図）

平成12年10月10日、調査地の草刈りを開始する。10月13日、調査区を設定し、Ａ区の表土層の掘り下げを人力にて開始する。10月16日、Ｂ区の表土層の掘り下げを開始する。10月26日、Ｂ区の遺構検出作業を開始する。10月30日、Ａ区の遺構検出作業を開始する。11月７日、Ａ区とＢ区の遺構検出写真撮影を行う。同日、Ａ区のＳＤ１とＢ区の現代坑の掘り下げを開始する。11月10日、現代坑の半掘を終了し、完掘作業を開始する。11月21日、Ａ区ＳＤ１の掘り下げを終了する。11月22日、Ｂ区の土坑とＳＢ１の掘り下げを開始する。12月４日、Ｂ区ＳＢ１の炭・焼土を取り上げる。12月５日、Ｂ区の土坑とＳＢ１の掘り下げを終了する。12月７日、Ａ・Ｂ区の遺構完掘写真撮影を行う。12月８日、図面測量が終了し、本日をもって現場作業を終了する。平成13年３月24日、地元の方や一般の市民を対象とした現地説明会を行い、約100名の見学者が訪れる。



第９図　調査地位置図

2．層位（第11・12図）

調査地は南から北へ延びる尾根上に位置し、全長75mで南から北へ向けて８mの比高差を測る。基本土層は第Ⅰ層茶褐色土、第Ⅱ層褐色土～灰褐色土、第Ⅲ層黄褐色土、第Ⅳ層黄橙色土、第Ⅴ層明黄色土である。

第Ⅰ層　表土でA・B区全域に堆積し、厚さ11～30cmを測る。

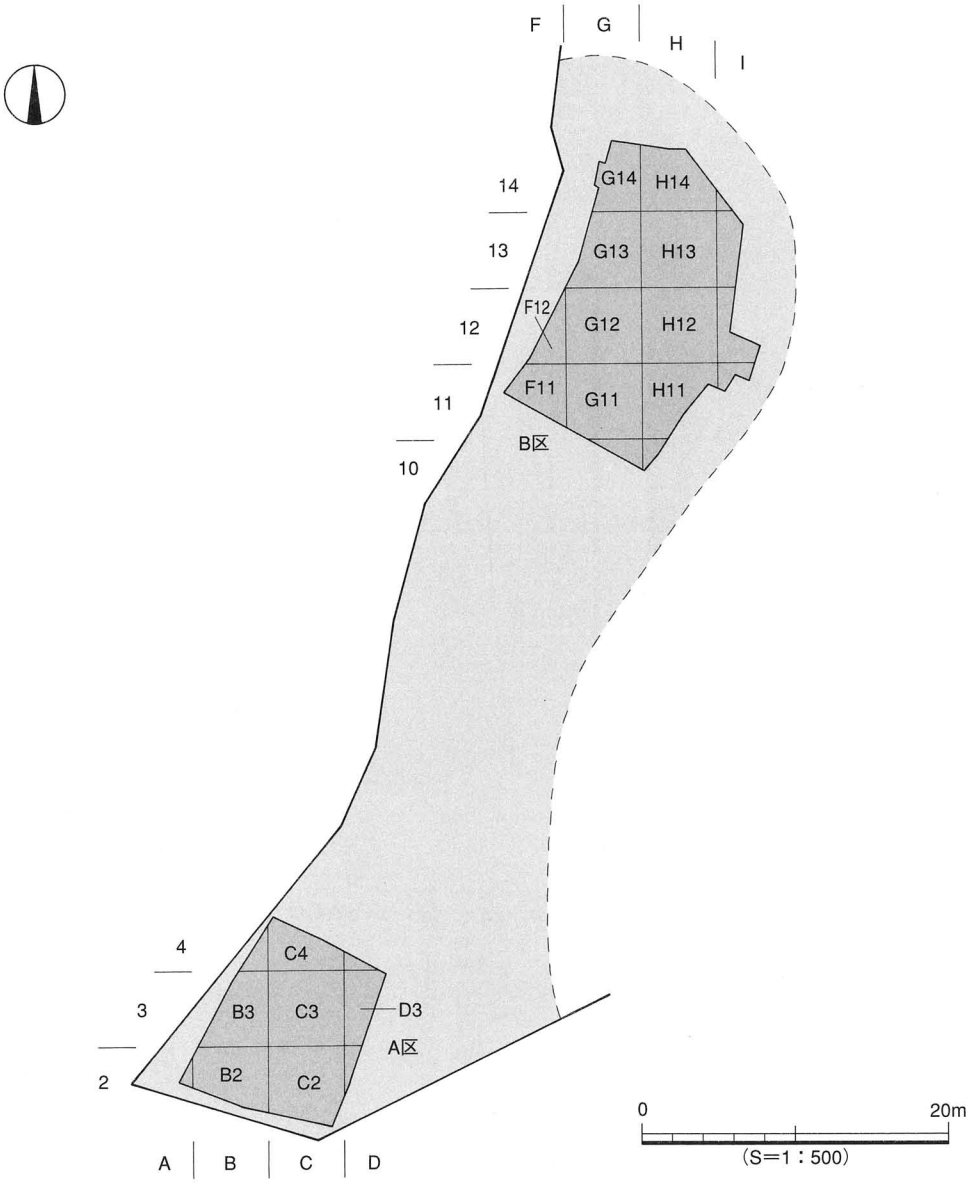
第Ⅱ層　A・B区の全域に堆積し、厚さ13～32cmを測る。

第Ⅲ層　B区の南側に堆積し、厚さ11～41cmを測る。

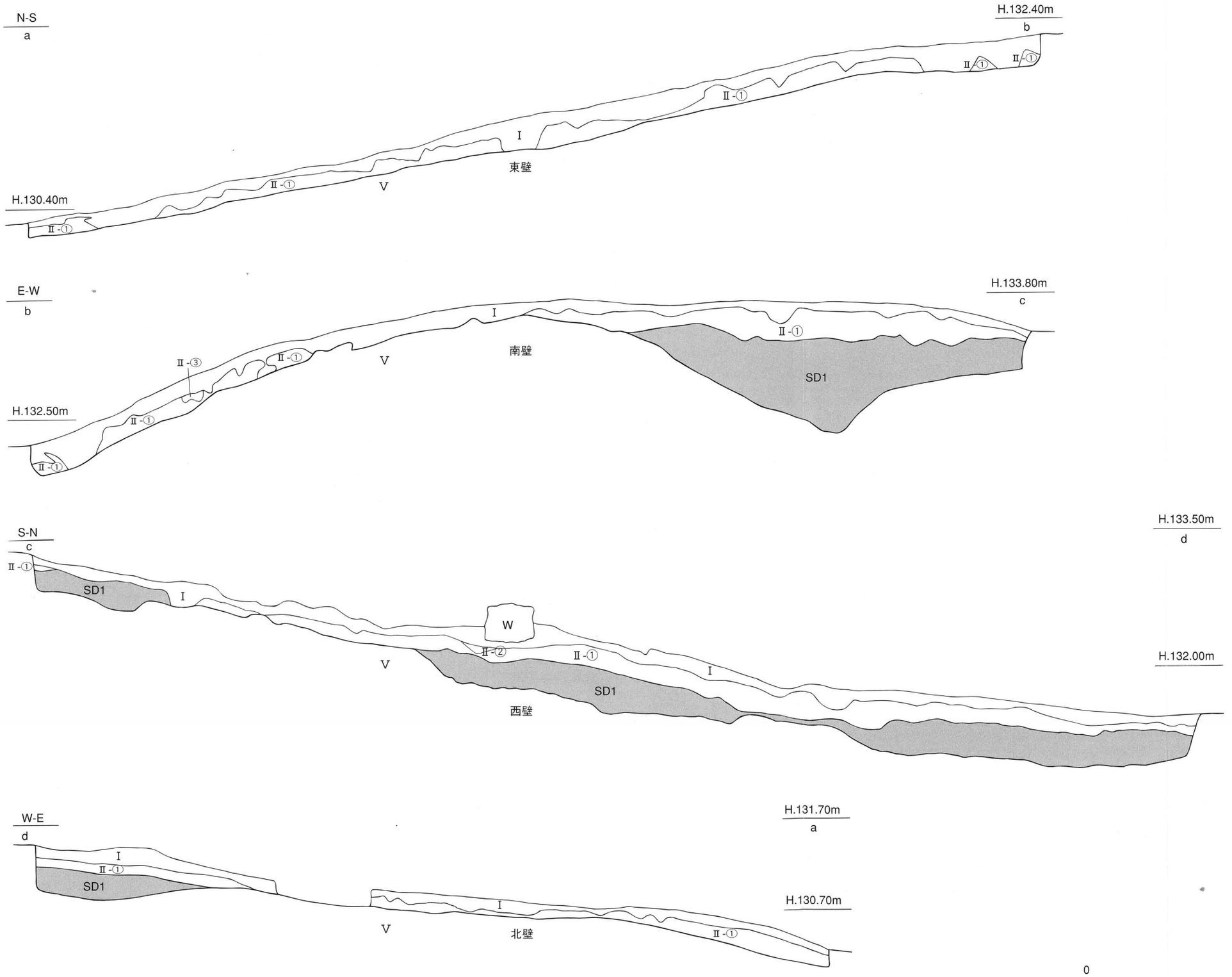
第Ⅳ層　B区の南側を中心に薄く堆積しており、弥生土器を包含する。厚さ10～32cmを測る。

第Ⅴ層　地山で遺構検出面となり、A区全域とB区北側では岩盤となる。

なお、調査区は５m四方のグリットを設定し調査を行った。（第10図）



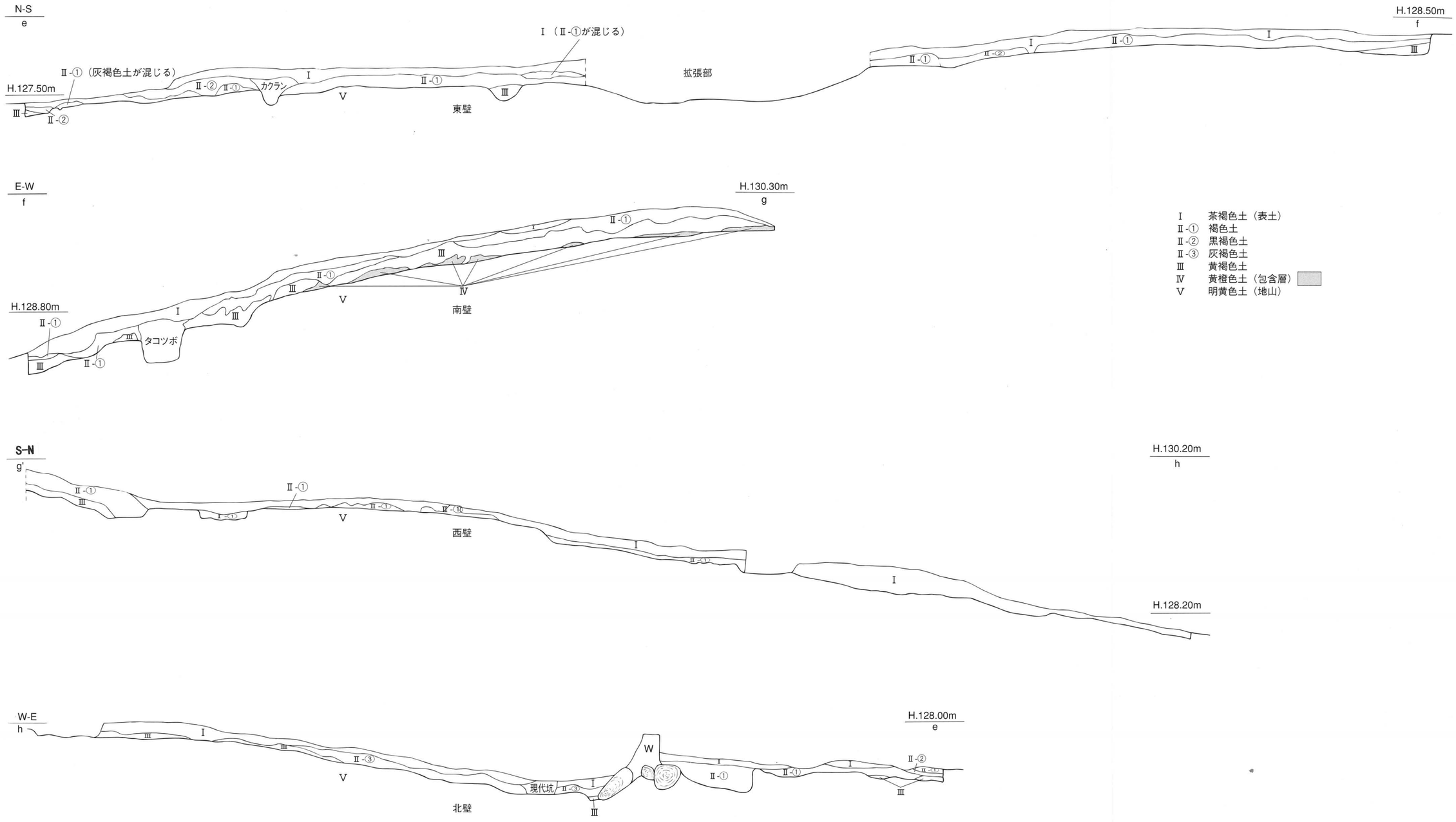
第10図　調査地区割図



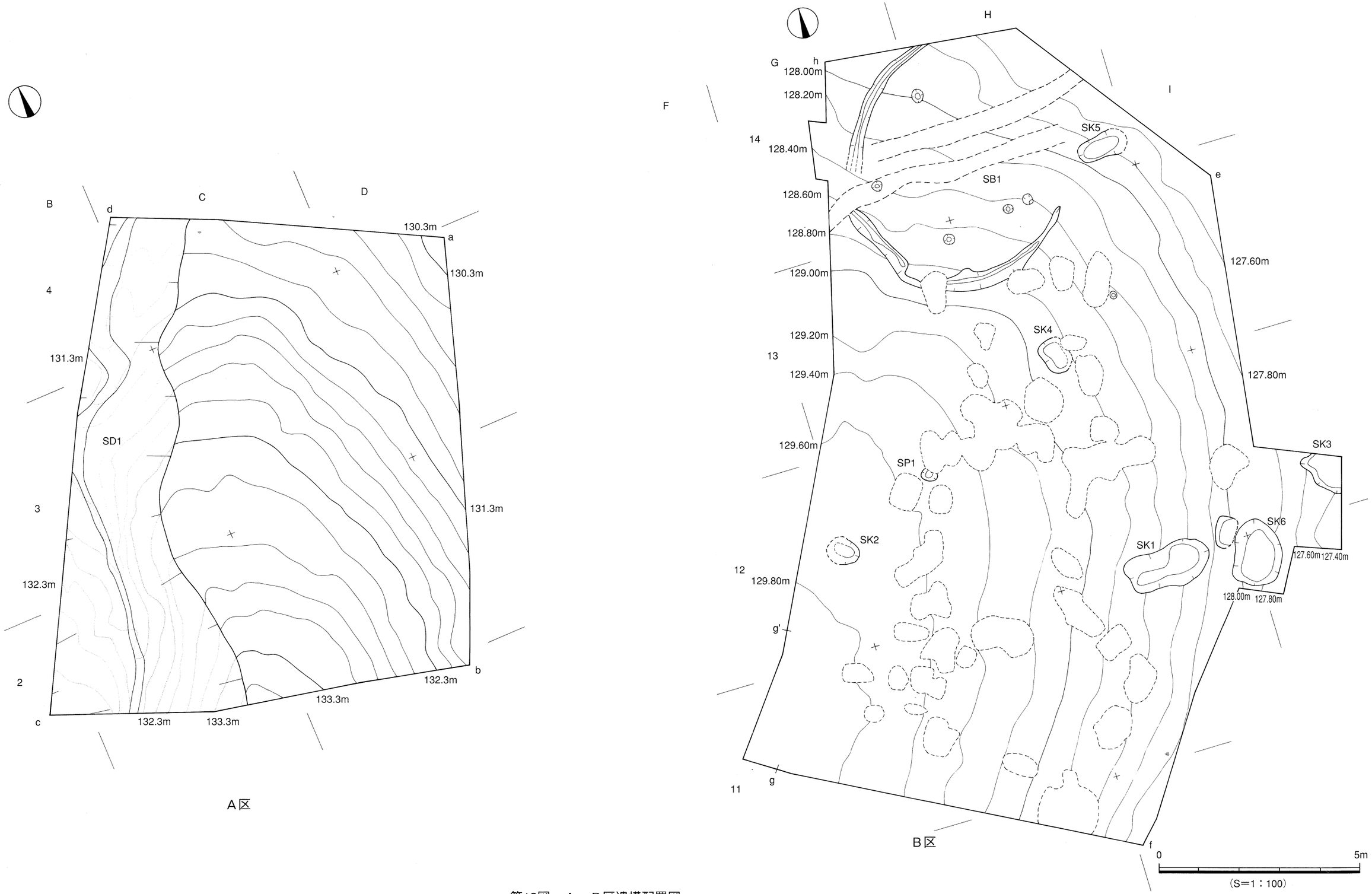
Ⅰ　茶褐色土（表土）
Ⅱ-①　褐色土
Ⅱ-②　黒褐色土
Ⅱ-③　灰褐色土
Ⅲ　黄褐色土
Ⅳ　黄橙色土（包含層）
Ⅴ　明黄色土（地山）

0　4m
（S＝1：50）

第11図　A区土層図


N-S
e
H.128.50m
f
Ⅰ（Ⅱ-①が混じる）
Ⅱ-①（灰褐色土が混じる）
H.127.50m
Ⅱ-②
Ⅱ-①
カクラン
Ⅰ
Ⅱ-①
Ⅲ
Ⅴ
東壁
拡張部
Ⅱ-①
Ⅱ-②
Ⅰ
Ⅱ-①
Ⅰ
Ⅲ
E-W
f
H.130.30m
g
Ⅱ-①
Ⅲ
Ⅱ-①
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
南壁
H.128.80m
Ⅱ-①
Ⅰ
Ⅲ
タコツボ
Ⅲ
Ⅱ-①
Ⅰ　茶褐色土（表土）
Ⅱ-①　褐色土
Ⅱ-②　黒褐色土
Ⅱ-③　灰褐色土
Ⅲ　黄褐色土
Ⅳ　黄橙色土（包含層）
Ⅴ　明黄色土（地山）
S-N
g'
H.130.20m
h
Ⅱ-①
Ⅲ
Ⅱ-①
Ⅱ-①
Ⅱ-①
Ⅴ
西壁
Ⅰ
Ⅰ
H.128.20m
W-E
h
H.128.00m
e
Ⅲ
Ⅰ
Ⅲ
Ⅱ-③
Ⅴ
W
現代坑
Ⅱ-③
Ⅰ
Ⅲ
北壁
Ⅱ-①
Ⅱ-①
Ⅰ
Ⅱ-②
Ⅱ-①
Ⅲ
0
4m
（S＝1：50）

第12図　B区土層図



第13図　A・B区遺構配置図

第５章　Ａ区の調査

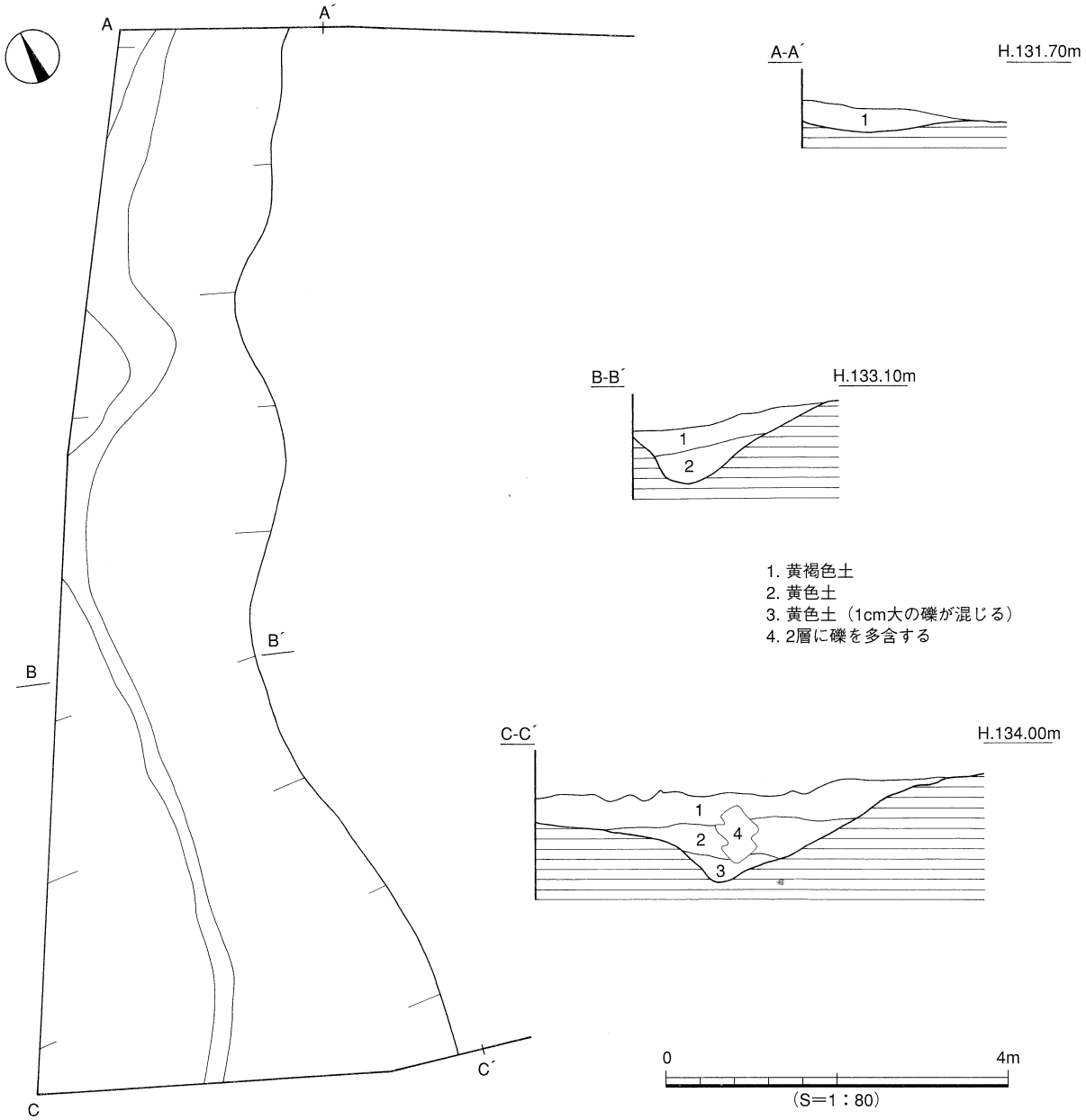
１．検出遺構（第13図）

第Ⅴ層上面にて溝１条を検出した。

(1)　溝

ＳＤ１（第14図）

調査区西側のＡ２・Ｂ２～Ｂ４・Ｃ４区に位置し、溝の南・北側や、溝の西側の上端部は調査区外に延びる。主軸は尾根に沿う様に南北方向を指向する。南側は直線的に南北方向をなし、北側はやや北東方向に振れる。規模は検出長12.5m、上場幅５m以上、深さ0.5～１mを測り、南側に比べ北側は溝床が浅くなり、溝床は南から北へ1.5mの比高差を測る。断面形態は南側がＶ字状、北側はレンズ状



第14図　A区SD1測量図

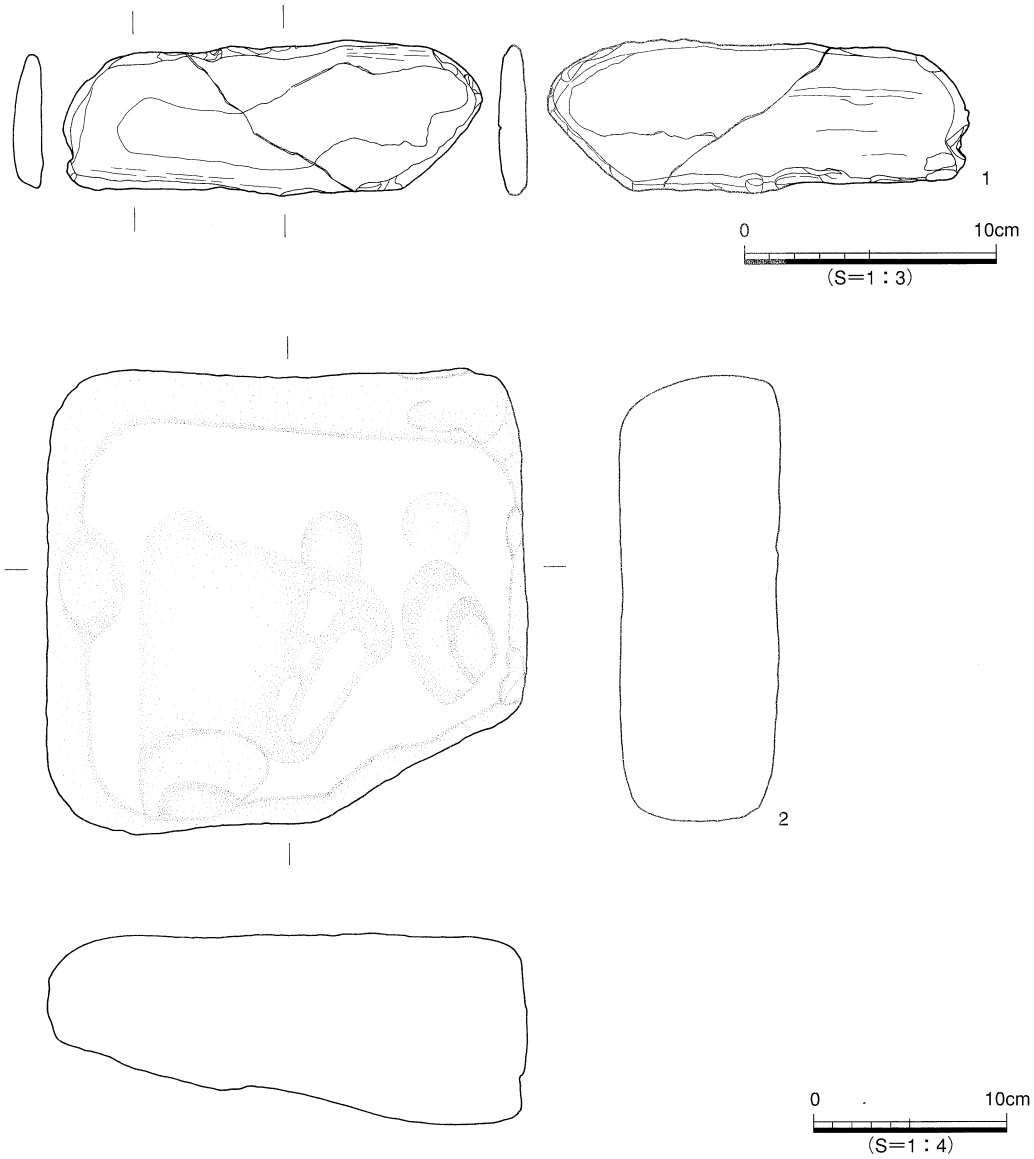
を呈し、埋土は上層が黄褐色土、中層が黄色土、下層が黄色土（1㎝大の礫が混じる）であるが、上層から下層にかけて厚さ70㎝、範囲は50㎝の不整楕円形状に黄褐色土に礫が混じるブロック層を検出した。遺物は溝床付近から弥生土器の小片が僅かに出土しただけである。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、弥生時代以降に埋没したとしか現段階では判らない。

2．第Ⅳ層出土遺物（第15図）

1は石庖丁の未製品である。緑色片岩の薄手の礫で、自然面に覆われるが、両面と周縁部を荒く研磨している。法量は長さ16.7㎝、幅6.0㎝、最大厚1.07㎝、重さ208.3ｇを測る。調査区南東部の東側斜面の浅い凹みに薄く堆積した第Ⅳ層中から出土した。

2は台石である。風化の進んだ砂岩製で、ほぼ完存品である。器面はA面は平らで、中央部に微細な凹凸が観察されることから作業面としての機能が窺える。B面は両端が突起しており、片方の突起部の一部が欠失する。法量は長さ25.5㎝、幅23.5㎝、最大厚10.0㎝、重さ10.3㎏である。



第15図　第Ⅳ層出土遺物実測図

第6章　B 区 の 調 査

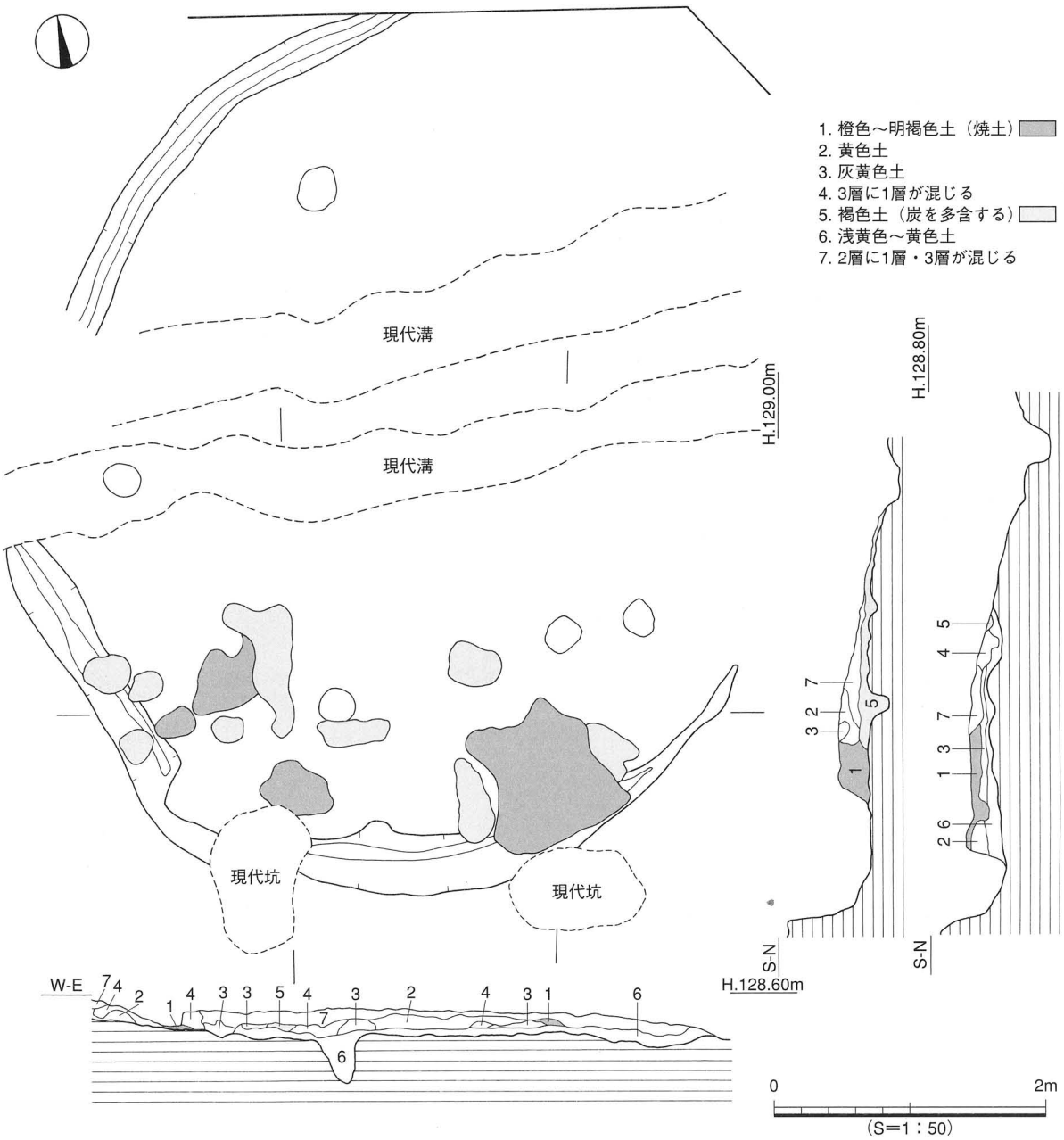
1．検出遺構（第13図）

第Ⅴ層上面にて弥生時代の竪穴式住居址１棟、土坑６基、柱穴１基を検出し、弥生土器片、須恵器片、石器、炭化材等が出土した。調査前は柑橘類の果樹園であったため、有機質肥料を入れる楕円形や不整形の穴が遺構検出面に掘り込まれている。遺構番号のない掘り込みは現代坑である。

(1)　竪穴式住居址

ＳＢ１（第16・17図）

調査区北側のＧ13～Ｇ14・Ｈ13～Ｈ14区に位置し、東西に平行して延びる２条の溝（現代の土地の

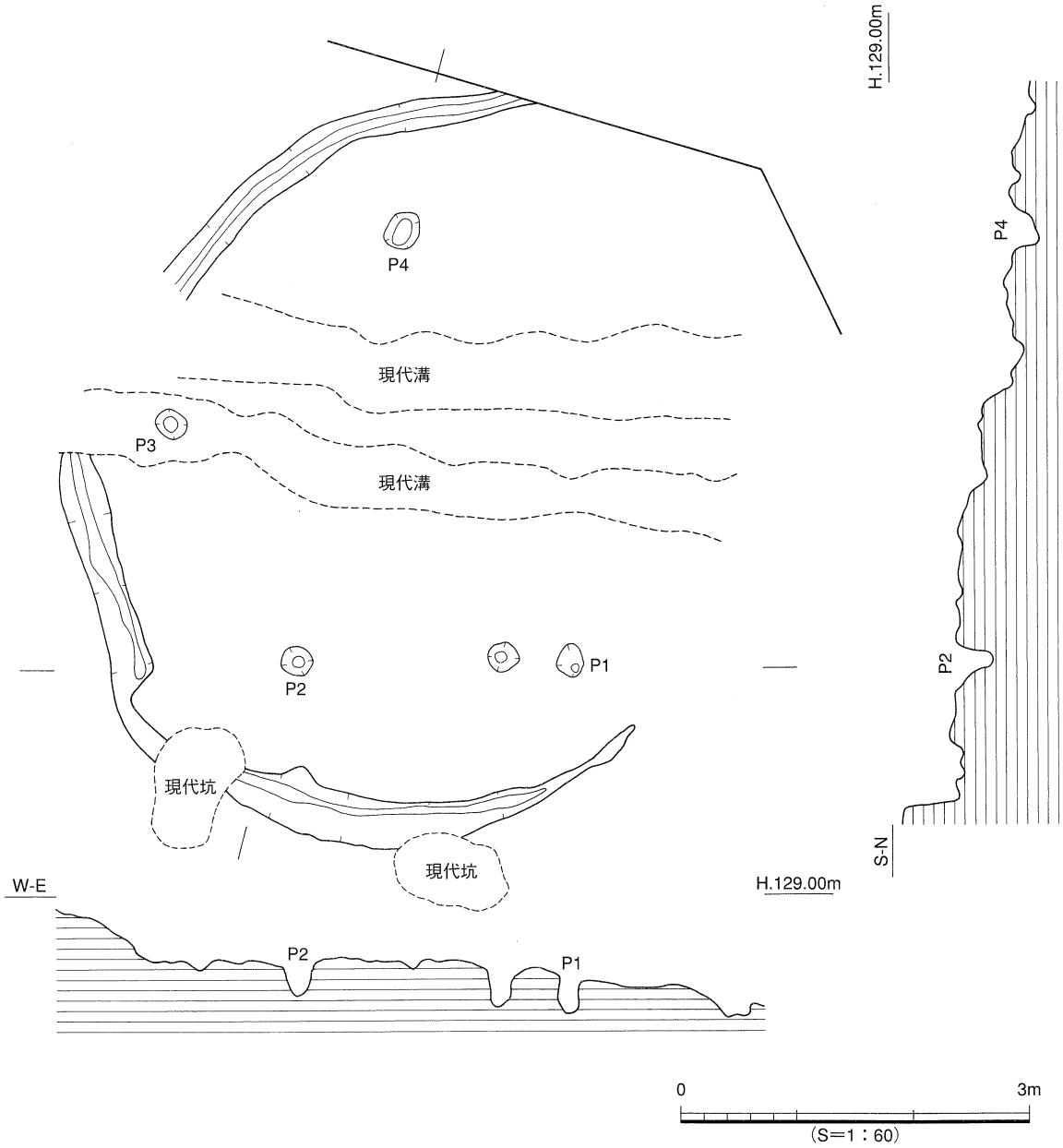


第16図　SB1測量図（1）

境界を示す溝）に切られており、北側の丘陵下方は耕作のため削平を受けている。平面形態は楕円形を呈し、南側に残存する壁体はほぼ垂直であり、床面は水平を呈する。規模は東西6.0m、南北6.5m、深さ50cmを測る。周壁溝は幅10～24cm、主柱穴は４基（Ｐ１～Ｐ４）を検出し直径25～40cm、深さ35～50cm、柱間1.8～2.5mを測る。床面付近では焼土と炭とが混ざり合った状態で検出された。埋土は黄橙色土で、遺物は弥生土器片・石斧・砥石・石器の未製品が出土する。

出土遺物（第18図）

弥生土器（３～６）：３～５は壺の口縁部である。３は外反する長い口頸部と口縁端部に沈線をもち、内面にハケ目調整、外面にミガキ調整を施している。４はやや外傾する長い口頸部をもち、外面は口縁部にナデ調整、頸部にミガキ調整を施している。５は直立する短い頸部に、外反する口縁部をもち、内外面ともハケ目調整を施している。６は甕の底部である。平底の底部で、短く内傾する立ち上がりをもつ。



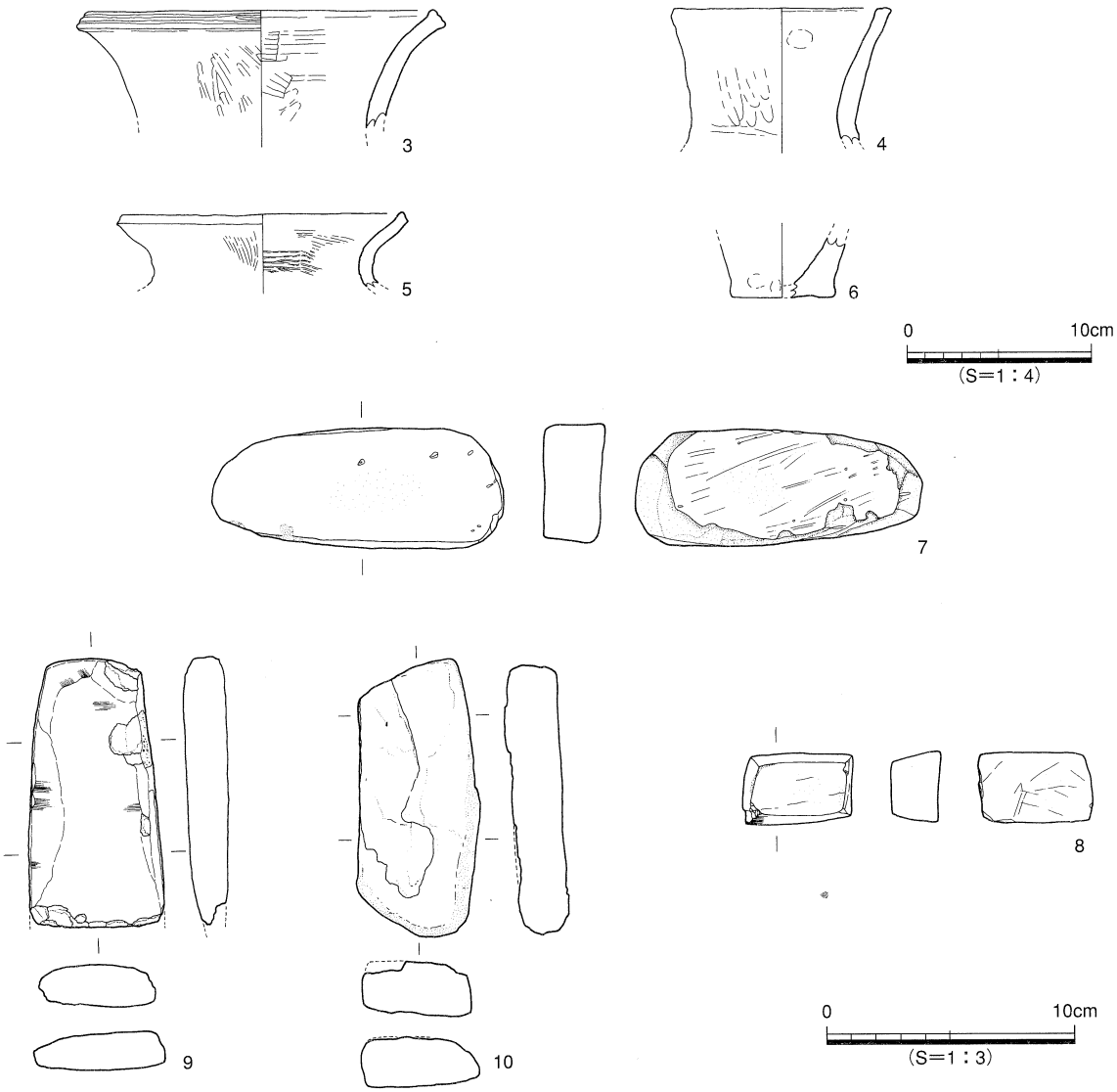
第17図　SB1測量図（2）

石器（7～10）：7・8は砥石の完存品で、両端面を除き四面が砥面として使用されている。上面では主に縦方向の微細な線条痕が観察される。7は表裏面とも滑らかな凹面をもち、長さ11.7㎝、幅4.8㎝、最大厚2.8㎝、重さ221.9ｇを測る。8は各面を砥面として使用し、長さ4.6㎝、幅2.8㎝、最大厚2.0㎝、重さ40.5ｇを測る小型品である。石材はいずれも石英粗面岩製。

9は偏平片刃石斧の完存品である。横断面形は台形状を呈し、刃部に対して基部は狭く、基部の平面形態は弱円基である。基部に比べ側面の研磨はあまく、胴張りで丸みがあり、面をなさない。さらに両主面の整形も同様に甘く、丸みがある。刃部は刃こぼれが顕著にみられる。長さ10.8㎝、幅5.5㎝、最大厚1.6㎝、重さ196.5ｇを測る。石材は緑色片岩製。

10は原石である。石材は緑色片岩で、片面に一部器面の剥落がみられるが、これ以外は自然面で覆われる。長さ11.3㎝、幅5.0㎝、最大厚2.2㎝、重さ219.4ｇを測る。

時期：出土遺物より廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



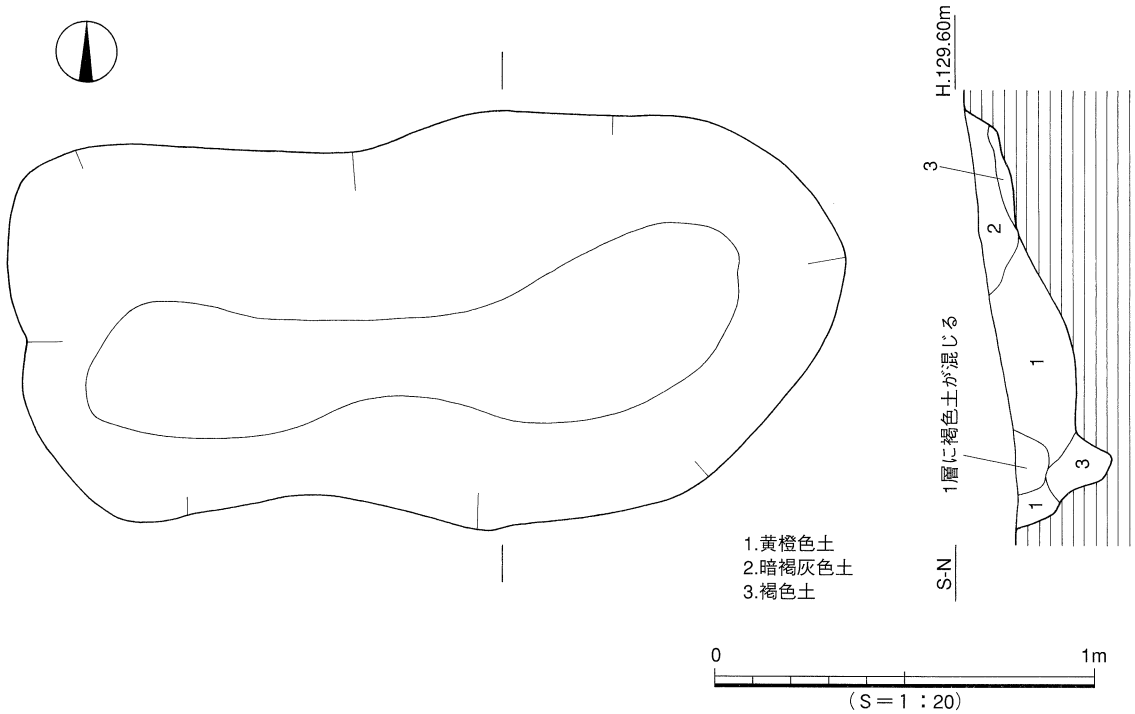
第18図　SB1出土遺物実測図

(2) 土坑

ＳＫ１（第19図）

調査区南東部のＨ11～Ｈ12区に位置する。規模は長軸2.2m、短軸1.1m、深さ25cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は旧地形に沿うように東側へ傾斜を示す。埋土は黄橙色土を基調とし、上部に暗褐灰色土、下部に褐色土がある。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

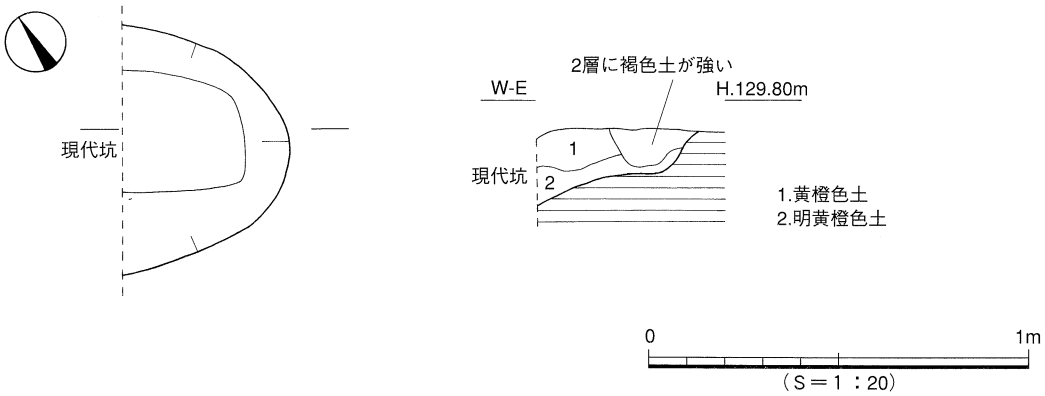


第19図　SK1測量図

ＳＫ２（第20図）

調査区南西部のＦ12・Ｇ12区に位置し、西側は現代坑に切られる。規模は東西0.45m以上、南北0.67m、深さ19cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈する。埋土は上層が黄橙色土、下層は明黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

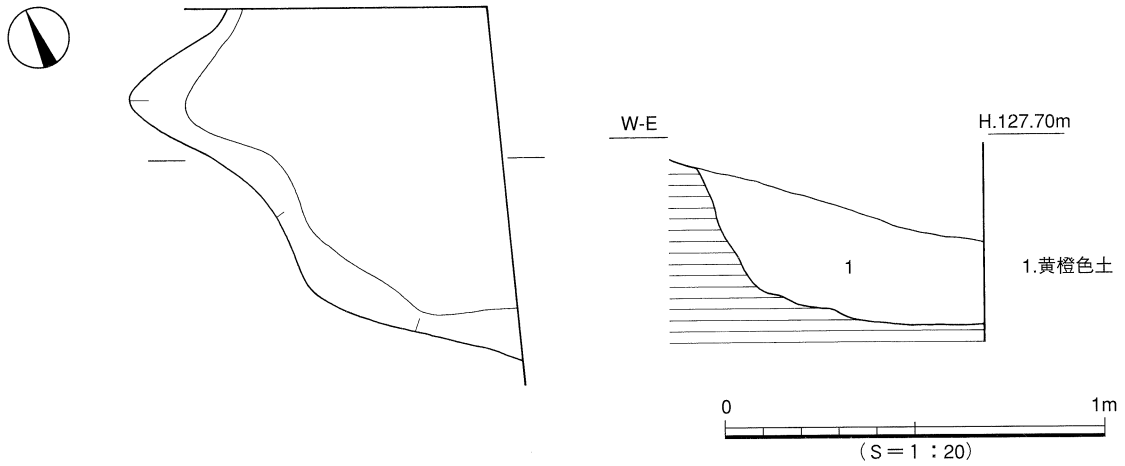


第20図　SK2測量図

ＳＫ３（第21図）

調査区南東部のＩ12区に位置し、北・東側は調査区外に延びる。規模は東西0.96ｍ以上、南北0.90ｍ以上、深さ42㎝を測る。平面形態は不整形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

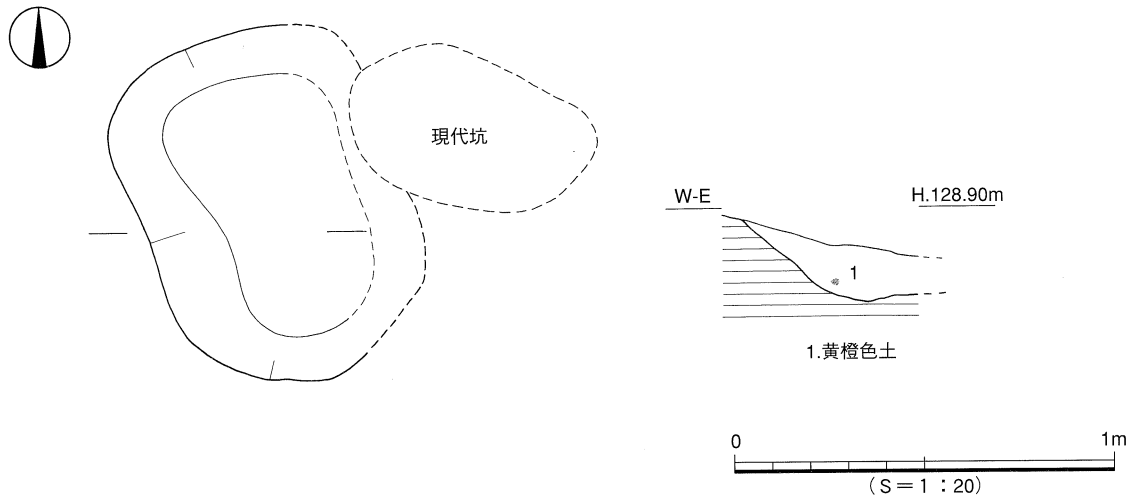


第21図　SK3測量図

ＳＫ４（第22図）

調査区南東部のＨ13区に位置し、東側は現代坑に切られる。規模は東西0.46ｍ以上、南北0.97ｍ、深さ14㎝を測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

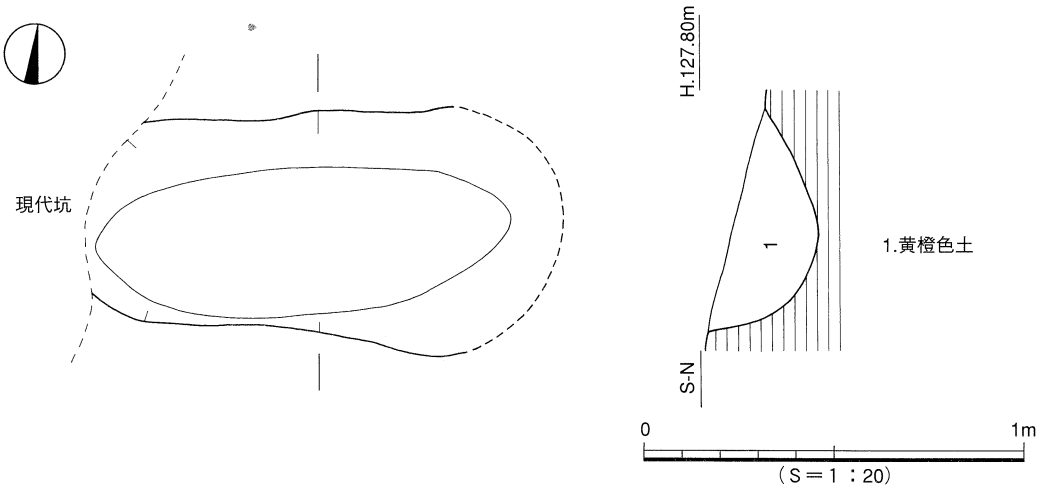


第22図　SK4測量図

ＳＫ５（第23図）

調査区北東部のＨ14区に位置し、西側は現代坑に切られる。規模は長軸1.23ｍ以上、短軸0.58ｍ、深さ23㎝を測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。

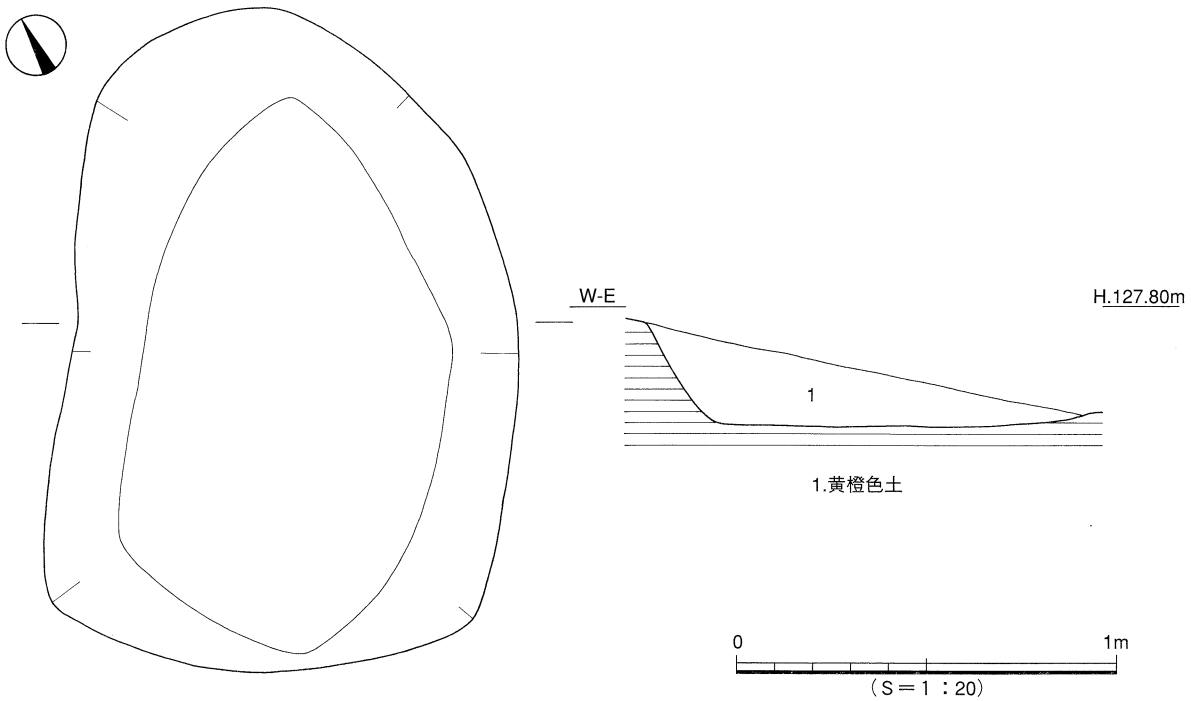


第23図　SK5測量図

ＳＫ６（第24図）

調査区南東部のＨ11～Ｈ12、Ｉ11～Ｉ12区に位置する。規模は長軸1.75ｍ、短軸1.16ｍ、深さ20㎝を測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は旧地形に沿う様に東側へ傾斜を示す。埋土は黄橙色土である。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土した。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



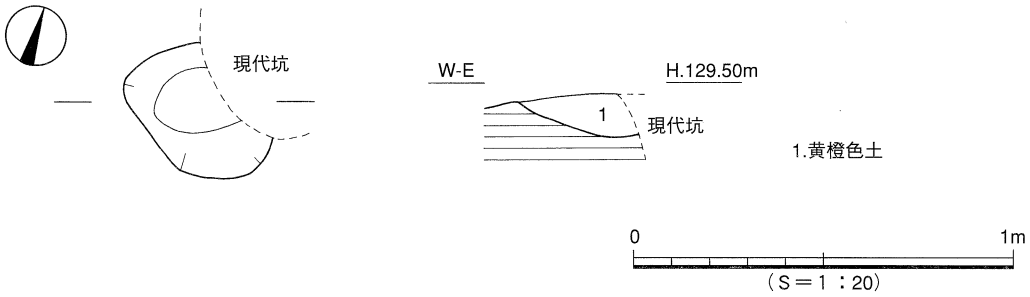
第24図　SK6測量図

(3) 柱穴

ＳＰ１（第25図）

調査区中央部西側のＧ12区に位置し、現代坑に切られる。平面形態は円形と推定する。規模は直径0.42㎝、深さ11㎝を測る。埋土は黄橙色土である。出土遺物はない。

時期：埋土がＳＢ１と同じことから廃絶時期は、弥生時代後期初頭とする。



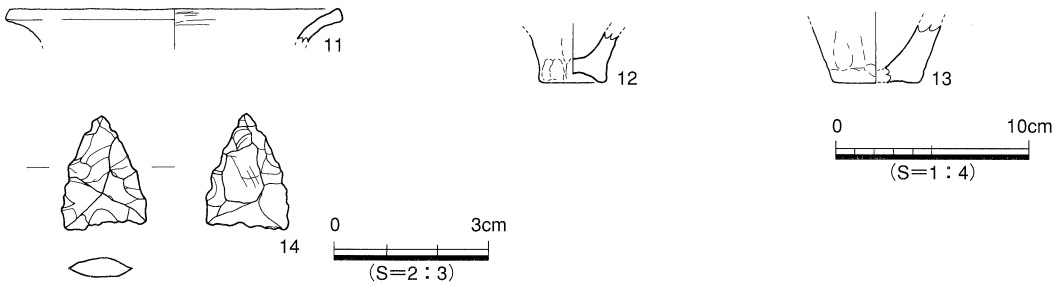
第25図　SP1測量図

２．出土遺物

(1) 第Ⅳ層出土遺物（第26図）

１）弥生土器（11～13）：11は甕の口縁部である。大きく外反する口縁部に、端部は平らな面をなす。12・13は甕の底部である。12は上げ底の底部、13は平底の底部である。

２）石器（14）：14は打製石鏃の完存品である。基部がわずかに抉られた凹基無茎式鏃で、二等辺三角形状を呈した小型品である。Ａ面はほぼ全面に二次剥離がおよび、Ｂ面の二次剥離は周縁部のみである。法量は長さ2.2㎝、幅1.7㎝、厚さ４㎜、重さ1.2ｇで、石材はサヌカイト製。

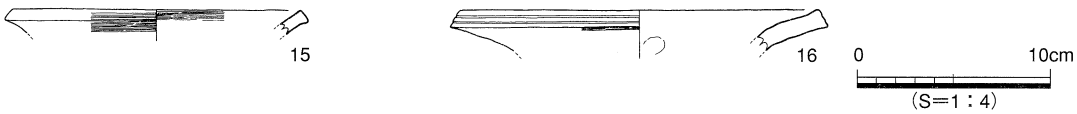


第26図　第Ⅳ層出土遺物実測図

(2) 第Ⅰ層出土遺物（第27図）

15は甕形土器である。外反する口縁部は端部が平らな面をなし、内外面にはハケ目調整が施される。

16は壺形土器である。大きく外反する口縁部は端部がやや上方に肥厚され、端面には２条の沈線文が巡り、内外面はヨコナデ調整が施される。

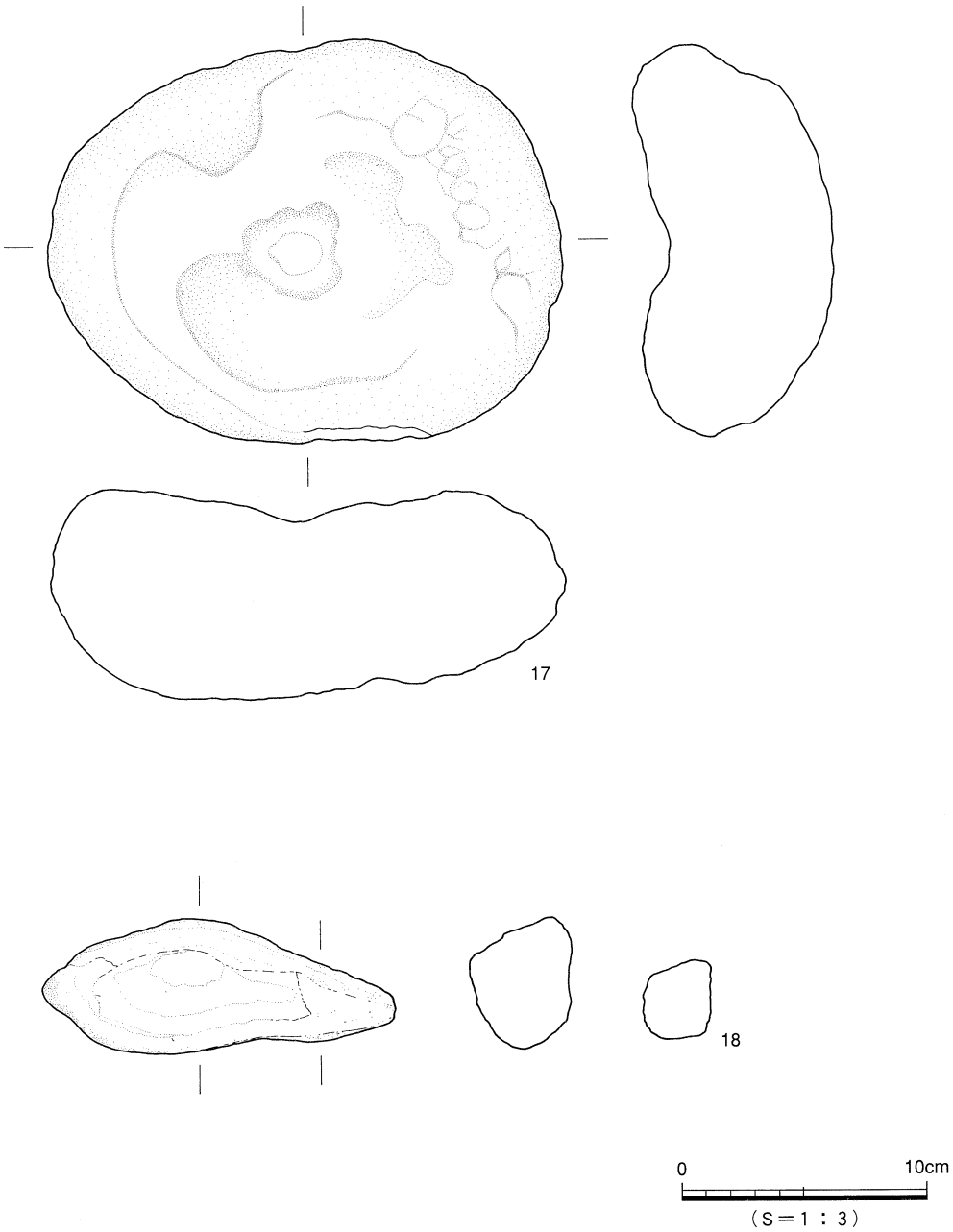


第27図　第Ⅰ層出土遺物実測図

(3) 表採遺物（第28図）

17は調査地の谷部で採取したものである。台石で、長さ21.1cm、幅16.1cm、厚さ7.2cm、重さ4.3kgを測り、上面中央部が凹む。石材は安山岩製である。

18はB区のＳＢ１周辺で採取したものである。厚みのある原石の中形品で、器面は自然面に覆われる。長さ14.4cm、幅5.5cm、最大厚4.2cm、重さ446ｇを測る。石材は緑色片岩である。



第28図　表採遺物実測図

遺構・遺物　－凡例－

(1)　以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺物観察表の各記載について。

法量欄（　）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、頸→頸部

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。(単位：mm)

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期初頭	楕円形	6.5×6.0×0.5	黄橙色土	28.5(推定)	4					○	北東部は削平を受ける

表2　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	A2・B2～B4・C4	V字状～レンズ状	12.5×5.0×0.5～1.0	南　北	黄褐色土 黄色土	ナ　シ	不　明	調査区外にのびる

表3　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	H11～12	楕円形	逆台形状	2.2×1.1×0.25	1.87	黄橙色土	ナ　シ	弥生後期初頭	
2	F12・G12	楕円形	舟底状	0.67×0.45×0.19	0.21	黄橙色土 明黄橙色土	ナ　シ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
3	I12	不整形	逆台形状	0.96×0.9×0.42	0.61	黄橙色土	ナ　シ	弥生後期初頭	調査区外にのびる
4	H13	楕円形	逆台形状	0.97×0.46×0.14	0.59	黄橙色土	ナ　シ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
5	H14	楕円形	逆台形状	1.23×0.58×0.23	0.57	黄橙色土	ナ　シ	弥生後期初頭	現代坑に切られる
6	H11～12 I11～12	楕円形	逆台形状	1.75×1.16×0.2	1.75	黄橙色土	弥　生	弥生後期初頭	

表4　A区第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	未製品	完　存	緑色片岩	16.7	6.0	1.07	208.3		11
2	台　石	ほぼ完存	砂　岩	25.5	23.5	10.0	10,300		

表5　B区ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
3	壺	口径 (18.8) 残高 6.4	外反する長い口頸部の端部に沈線が巡る。	ミガキ	ハケ目(9本/cm) 指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1～2) ◎		12

B区ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
4	壺	口径　11.6 残高　7.3	やや外傾する口縁部に端部は平らな面をなす。	㊐ナデ ㊥ミガキ	ナ　デ	橙　色 橙　色	石･長(1～5) ◎		12
5	壺	口径（15.2） 残高　3.9	直立する短い頸部に外反する口縁部をもつ。	ハケ目(7本／cm)	ハケ目(8本／cm)	にぶい黄橙色 橙　色	石･長(1～2) ○		12
6	甕	底径（5.4） 残高　3.25	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。	ナ　デ 指頭痕	ナ　デ	にぶい黄橙色 灰　色	石･長(1～4) △		12

表６　Ｂ区ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ(cm)	法　量 幅(cm)	法　量 厚さ(cm)	法　量 重さ(g)	備　考	図版
7	砥　石	完　存	石英粗面岩	11.7	4.8	2.8	221.9		12
8	砥　石	完　存	石英粗面岩	4.6	2.8	2.0	40.5		12
9	扁平片刃石斧	完　存	緑色片岩	10.8	5.5	1.6	196.5		12
10	原　石	完　存	緑色片岩	11.3	5.0	2.2	219.4		

表７　Ｂ区第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
11	甕	口径（17.4） 残高　1.8	大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなす。	ナ　デ	ナ　デ	にぶい黄橙色 橙　色	長(1) ◎		11
12	甕	底径（3.4） 残高　2.5	上げ底の底部である。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄色	石･長(1) ◎		11
13	甕	底径（4.6） 残高　3.0	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。	ナ　デ	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石･長(1～3) ◎		

表８　Ｂ区第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ(cm)	法　量 幅(cm)	法　量 厚さ(cm)	法　量 重さ(g)	備　考	図版
14	石　鏃	完　存	サヌカイト	2.2	1.7	0.4	1.2		11

表９　第Ｉ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
15	甕	口径（15.2） 残高　1.3	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ハケ目（11～13本／cm）	ハケ目（11～13本／cm）	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1～2) ◎		11
16	壺	口径（19.0） 残高　2.2	大きく外反する口縁部に端部はやや上方に肥厚され、端面に２条の沈線が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙　色 にぶい橙色	石･長(1～2) ◎		11

表10　表採出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ(cm)	法　量 幅(cm)	法　量 厚さ(cm)	法　量 重さ(g)	備　考	図版
17	台　石	完　存	安山岩	21.1	16.1	7.2	4,300		
18	原　石	完　存	緑色片岩	14.4	5.5	4.2	446		

第7章　調査の成果と課題

今回の調査では、弥生時代の遺構と遺物、時代不詳の溝を確認した。遺構は竪穴式住居址１棟、土坑６基、柱穴１基、溝１条、遺物は、弥生土器の甕・壺、石器の石庖丁・石鏃・砥石・作業台、石器の未製品や原石が出土した。

１．土層

調査地は丘陵の尾根部に位置しており、調査前は柑橘類の果樹園であったため、至る所に穴が掘り込まれていた。調査の結果、第Ⅰ層の表土は腐葉土、第Ⅱ層は腐葉土を含む堆積土、第Ⅲ層は現代の農耕に伴う造成土、第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層であり、Ｂ区の竪穴式住居址や土坑・柱穴を覆っており、遺構の埋土となり、尾根部の比較的平坦地にだけ堆積する。第Ⅴ層の地山はＡ区やＢ区の北側の傾斜地では岩盤であり、Ａ区の北側からＢ区の南側にかけては堆積土であり、この上に住居遺構が形成される。

２．遺構

Ａ区で検出したＳＤ１は、旧地形の岩盤にＶ字形に掘り込まれた人工的な溝であり、尾根に沿う様にやや湾曲しながら縦断する。溝の南北端は調査区外に延びており、現況から調査区外の南側ではさらに深くなり、北側は消滅すると推測する。土層の堆積状況や埋土に有機物が殆ど含まれていないことから、比較的短期間に人工的に溝が埋没したことが考えられる。出土した弥生土器の小片は流入品であり、溝に直接関連した遺物の出土はなく、溝の埋没時期は不明である。ＳＤ１南側の数メートル先の尾根線上には、松ヶ谷古墳群の９号墳が分布調査で確認されており、この溝はその古墳に伴う施設であることも考えられる。

Ｂ区は、弥生時代後期の竪穴式住居址ＳＢ１と、それと同じ埋土の土坑や柱穴を検出し、この丘陵尾根部の比較的平坦な地に集落を構えていたことがわかった。竪穴式住居址は、南壁は地山を削って壁となすが、北半は掘り方がなく、土壁をもたない可能性がある。主柱穴は４本を検出しているが、その配置状況からは北東部に１本あったものと考えられ、５本柱を想定しておく。住居址内では、南半分の床面付近のいたる所から焼土や炭化材を検出した。このことから、火災を受けた住居が考えられる。

また、ＳＢ１内からは扁平片刃石斧や砥石に混じり、石庖丁の未製品や原石が出土したことから、この住居址内では、砥部川で採取される緑色片岩を用いて石器の製作が行われていたとみられる。今回の調査では、竪穴式住居址は１棟に検出が限られたが、調査地外である北隣にも比較的平坦な地が延びており、この地にも竪穴式住居址の存在が考えられる。

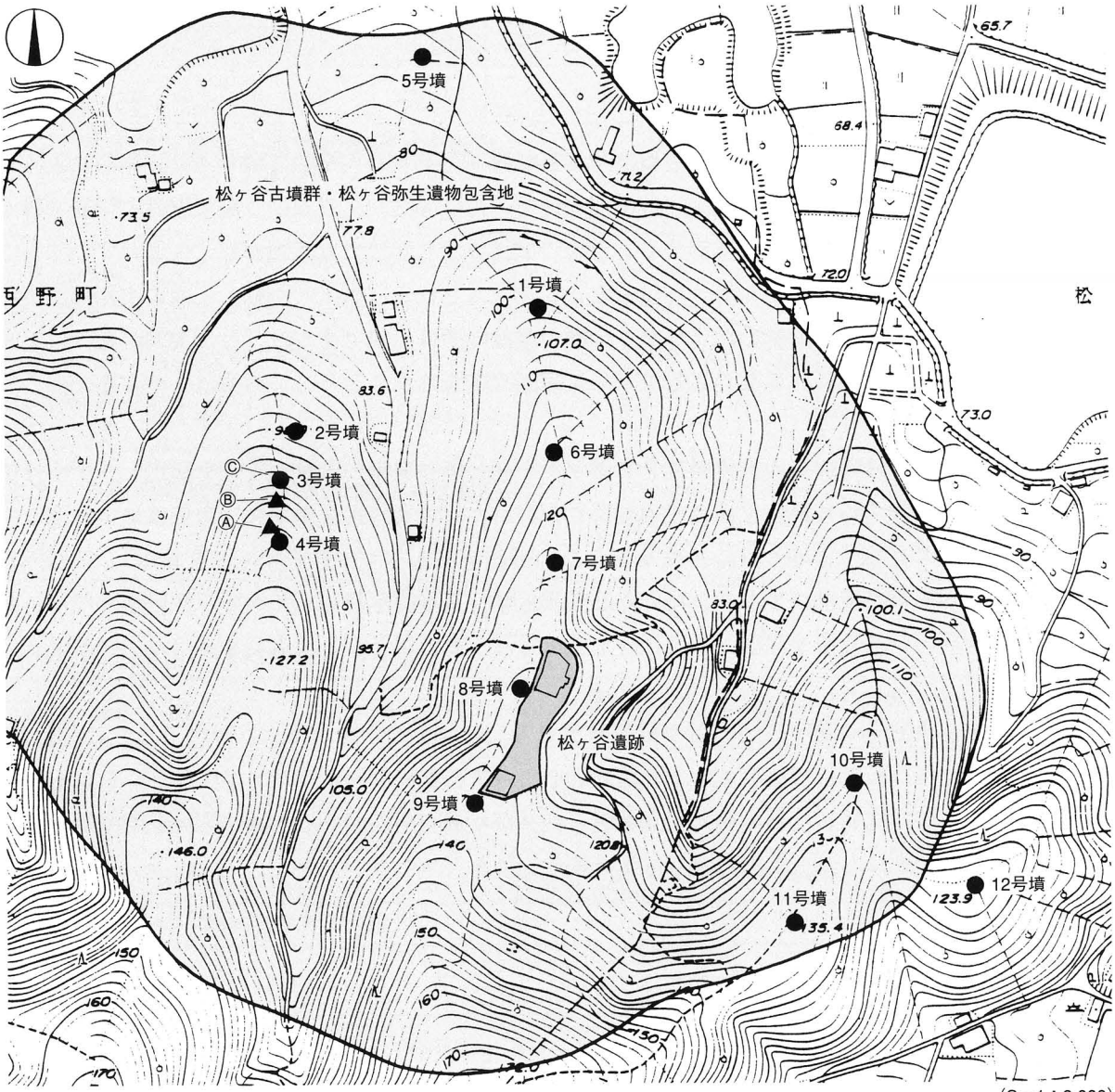
3．松ヶ谷古墳群内で確認した石室

(1)　立地（第29図）

松山南部地区農道整備事業に伴う西野町の試掘調査２区西隣で、地表面に石の露出が確認された。石が露出するのは、南から北へ延びる丘陵尾根上の北西斜面である。この丘陵の尾根幅は15～20mを測り、東西の両側は急斜面となって谷へ落ち込んでいる。一方、南側は緩やかに上がり、雑木林が形成され、地表面には落ち葉が厚く堆積する。北側は、現在、果樹園として土地利用が図られ、蜜柑が栽培されている。

標高は、最高所で117.913m、丘陵の北に広がる水田面との比高差は47～34mを測り、視界が狭いながらも平野を望むことができる。

なお、丘陵の北西斜面は段々状を呈し、他と比べて地形の改変は著しい。この段と段との間には幅４m程度の緩斜面が形成されているが、蜜柑等の果樹は栽培されていない。



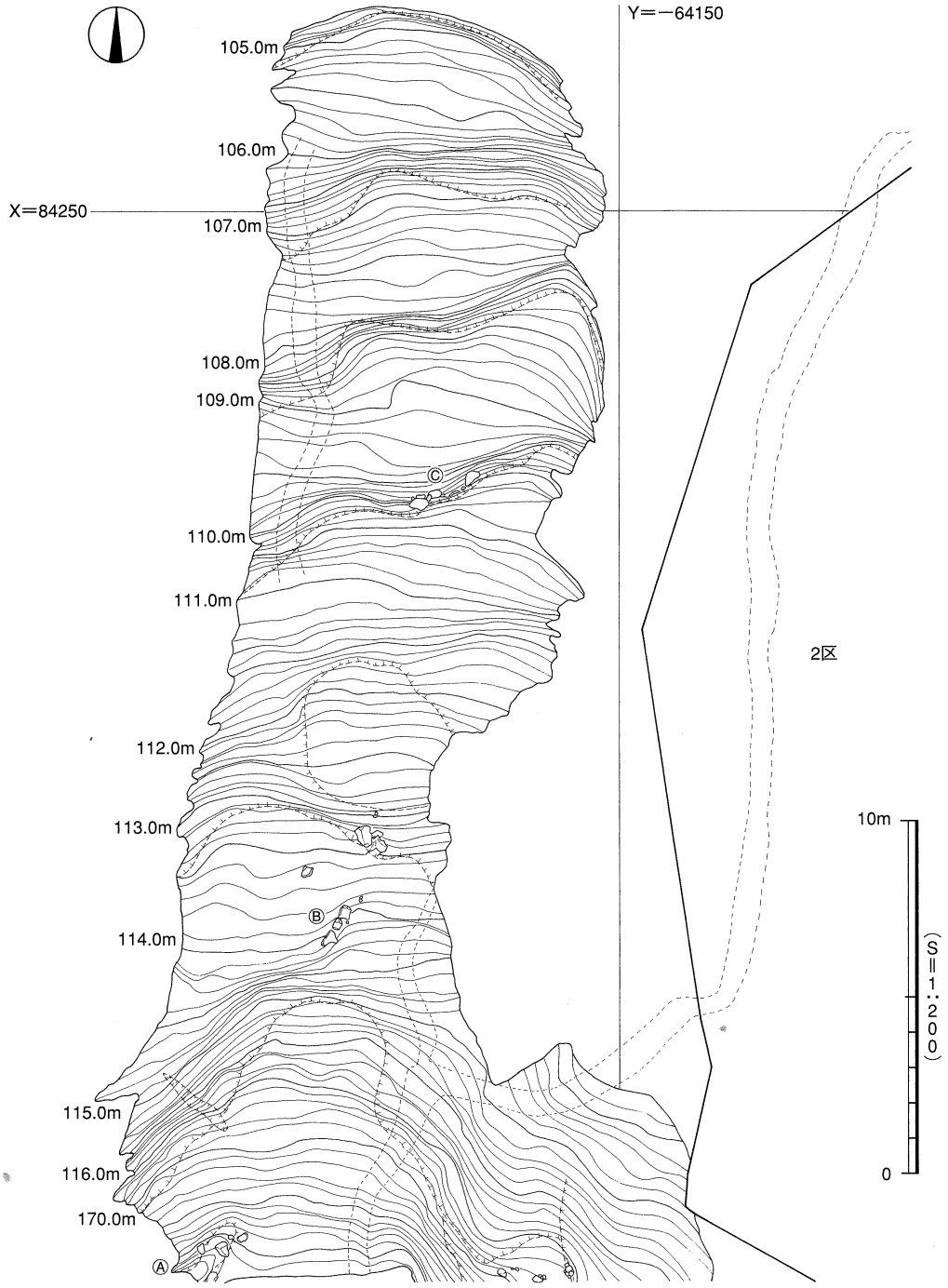
(S=1：3,000)

第29図　位置図（1）

(2) 概要（第30～32図）

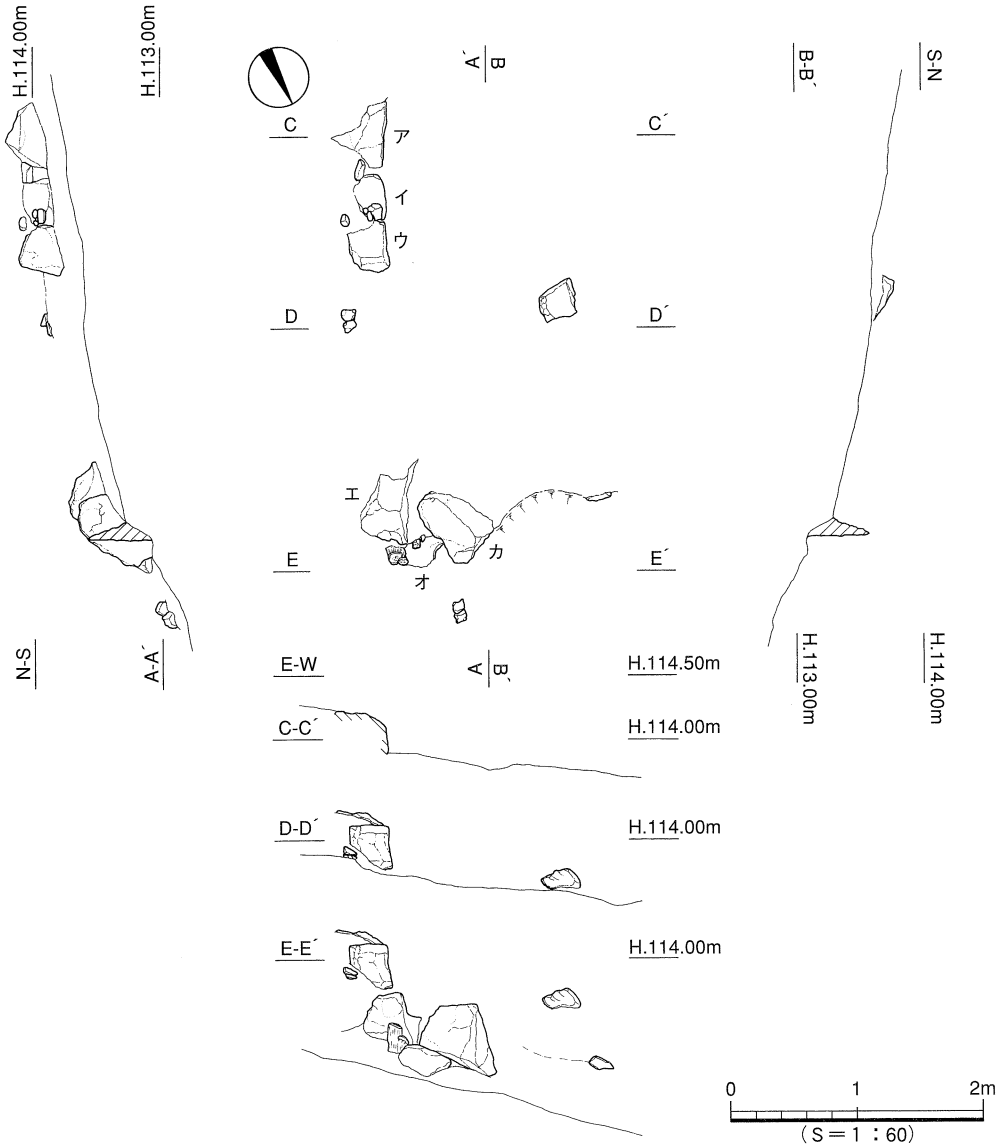
尾根上の地表には、数箇所で石が露出している。報告では、石が露出する箇所を便宜的に南から北へ向かってＡ・Ｂ・Ｃ地点として記述する。

まず、Ａ地点は、石が最高所の標高117.9～117.3ｍに分布するところである。石は40㎝大が数個あるが、規則性はなく、散在する。石の多くは２～３㎝大の砕石で、地表面に岩脈が露出しているところでは、砕石が多く分布する傾向にある。このことから、Ａ地点は石室を構成するものではなく、露出する岩脈から風化・転石した砕石であると考えられる。したがって、Ａ地点に伴う墳丘は想定できない。



第30図　位置図（2）

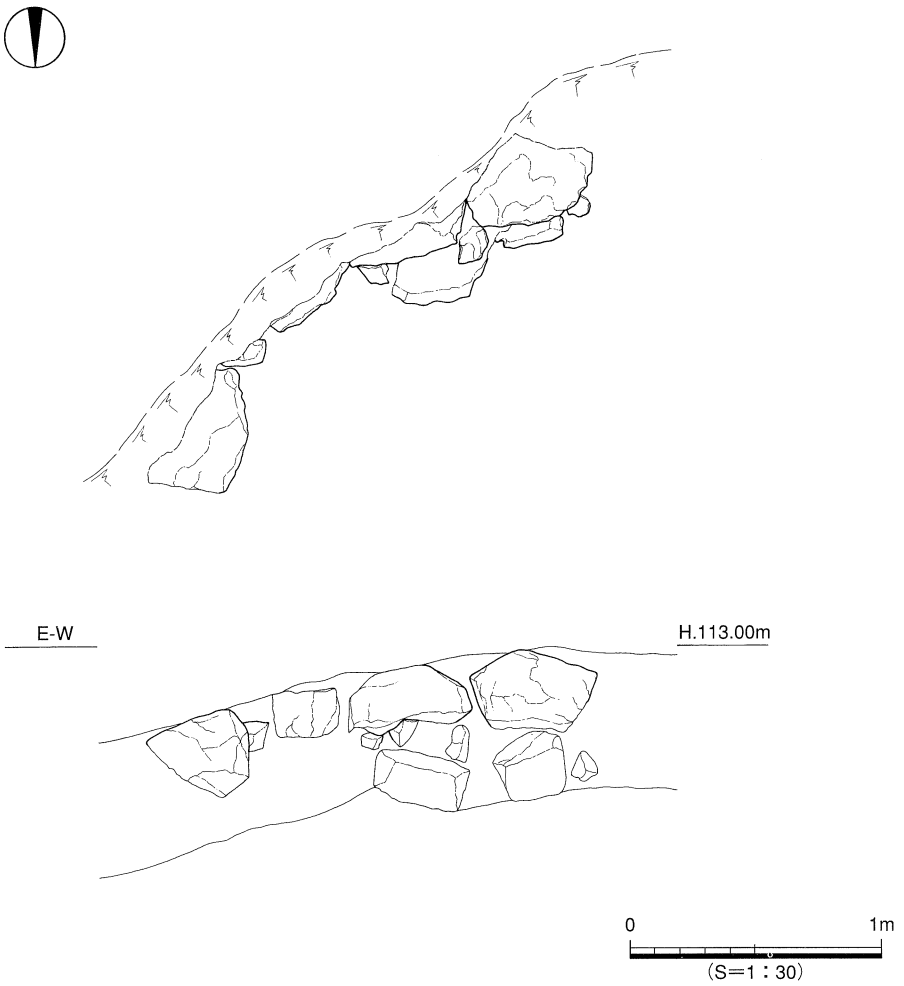
Ｂ地点は、石が標高114.1～113.2mに分布するところである。南から数えて２段目の緩斜面に、石が点在する。石は40～60cm大の大形の切石が多く、東側の切石（ア～エ）がほぼ直線的に面をなして並ぶ。石は、N-27.5°-Eを長軸方向とする石室で、切石を利用することから古墳時代後期～終末期の横穴式石室と推定される。なお、開口方向や石室の規模は不明である。切石（エ～カ）には、東西方向に傾斜変換線がみられ、北西部にはコーナーを想定させるラインが看取される。さらに、北東部にも、コーナー状の傾斜変換線が認められる。ただし、コンターラインは、これらの傾斜変換線に沿うようには巡らず、切石も整然と積み上げられた状態で遺存しておらず、切石（カ）はあたかも切石（エ）からずれ落ちたかのように思える。これらのことから、傾斜変換線が後世の地形改変によって生じた可能性があり、必ずしも古墳築造時のものとはいえない。したがって、Ｂ地点に伴う墳丘については、地表面を観察する限り、墳形や墳丘規模を特定することはできない。なお、確認された切石（ア～カ）の表面には、苔が広範囲にわたってみられ、このような状態がかなり以前から生じていたことを示唆している。切石（ア～ウ）に対して切石（エとカ）は大形で、しかも50～60cm低い位置にある。このことは、切石（ア～ウ）の下には、さらに、大形の切石が存在する可能性があり、壁体が少なくとも、もう一段遺存しているかもしれない。



第31図　B地点現況図

C地点は、石が標高109.7～110.2mでほぼ並んで分布するところである。南から数えて緩斜面の3～4段目に移行する崖面に石が露出し、一部は積み上げられている。石は30～50㎝大の切石で、ほぼ水平に2段が積み上げられ、間には10㎝大の小形の切石が詰められるところがある。石室の長軸方向は判然とせず、露出する石列が石室のどの壁体を構成しているかは不明である。

A～C地点を含めて、確認した範囲では、遺物は採取できていない。



第32図　C地点現況図

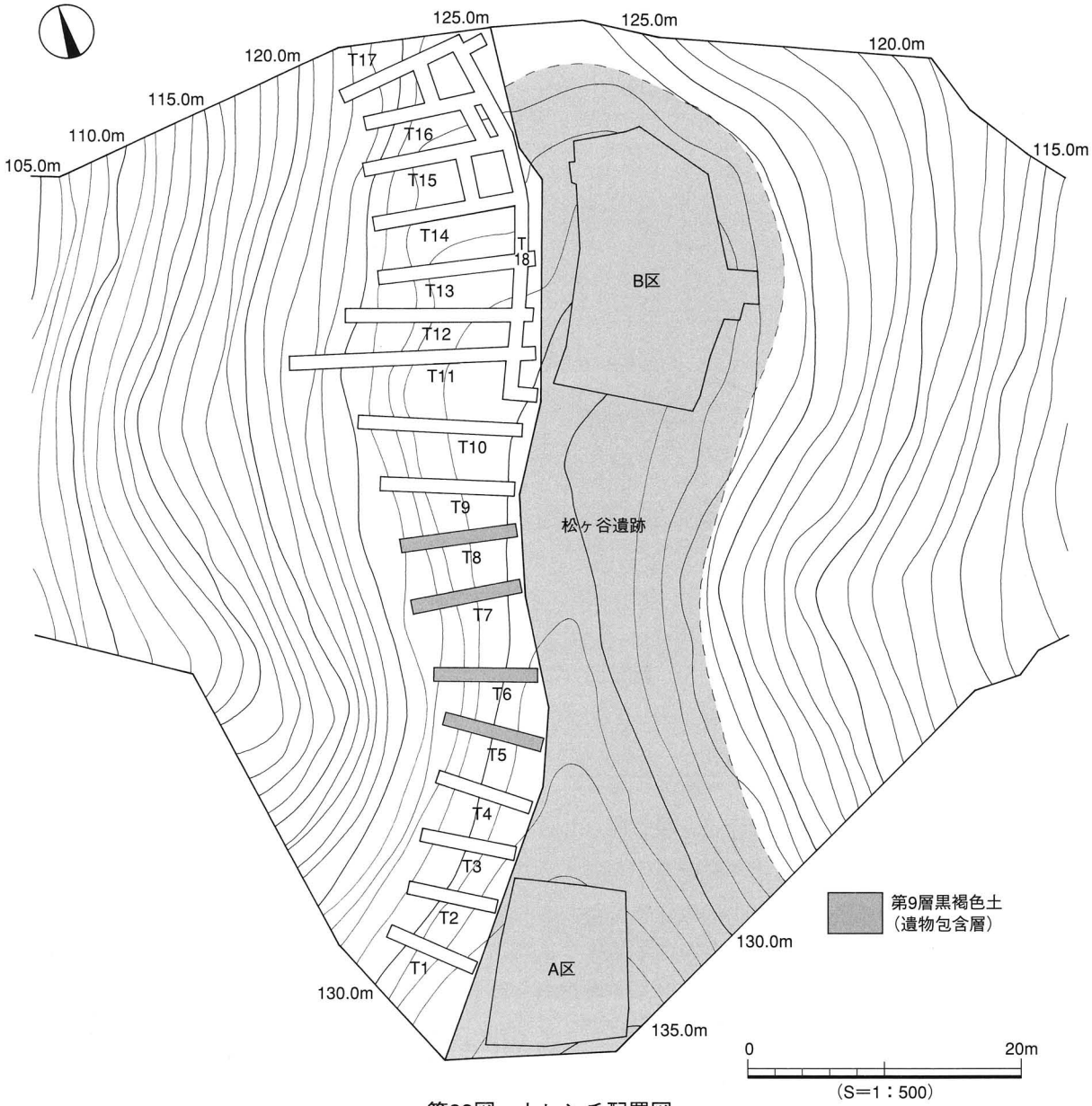
(3)　小結

今回、2区周辺で確認されたB地点とC地点は、それぞれが横穴式石室である可能性が認められた。これを、愛媛県が作成した古墳分布台帳と照らし合わせたところ、B地点は松ヶ谷3号墳、C地点は松ヶ谷2号墳に該当する可能性が高いものと考えられる。このことは、2区のある丘陵尾根上には、後期から終末期にかけての古墳が複数存在することを示唆するものである。B地点やC地点よりも高所に位置する3区では、古墳の存在を示す遺構や遺物が全く確認できなかった。このことから、松ヶ谷古墳群は、平野を望むことができ、しかも標高のやや下がった丘陵の尾根線上に分布する可能性が考えられるのである。これは、東の尾根筋にある松ヶ谷1号墳が、標高のやや下がった位置に築造されていることと共通しており、今回の確認により、同古墳群の分布を検討する上で、重要なデータが得られたといえよう。

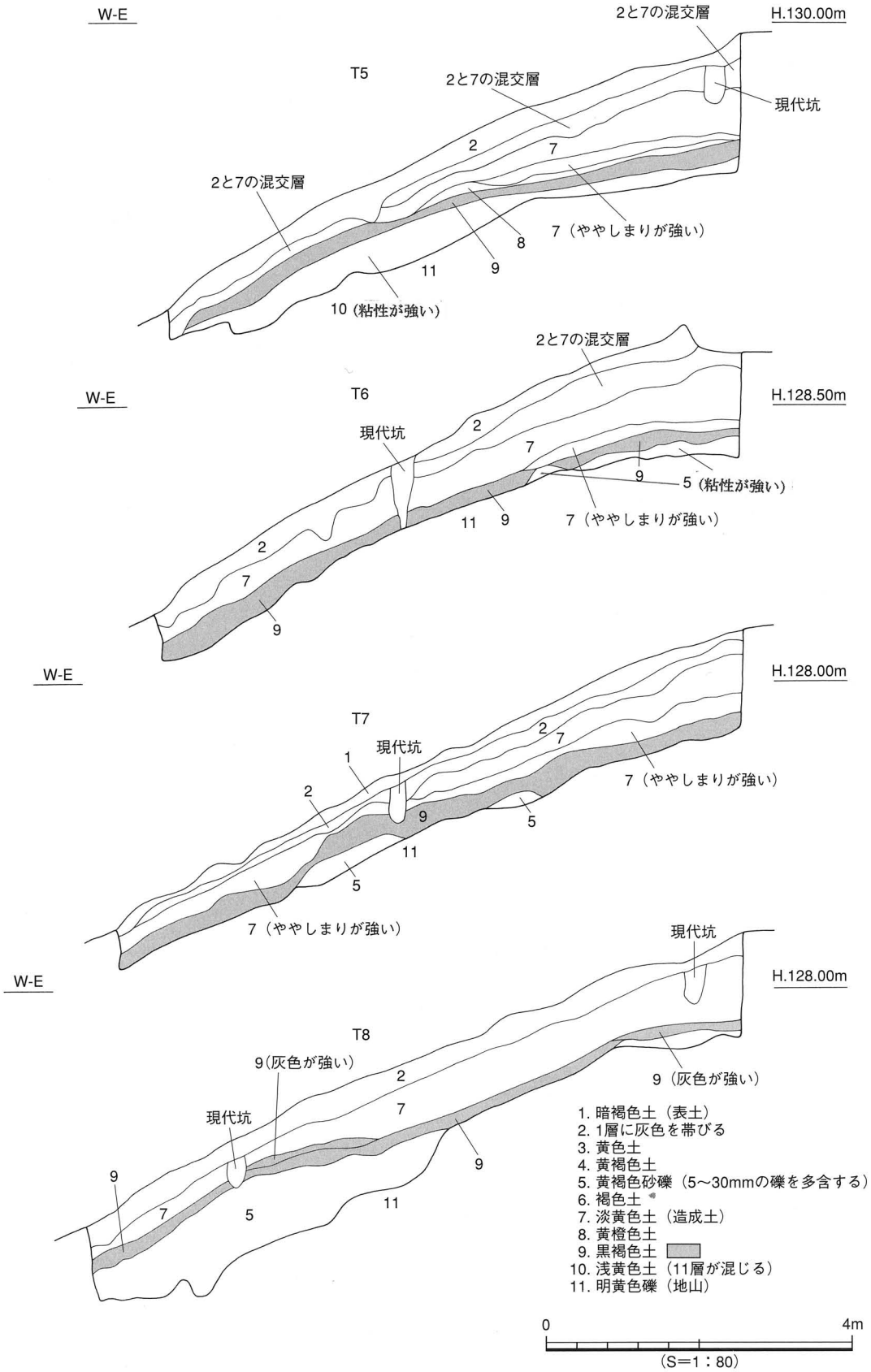
4．西野町試掘調査の出土遺物

(1) 概要（第33・34図）

松ヶ谷遺跡に隣接する同一丘陵上の西側斜面で、松山南部地区農道整備事業に伴う西野町の試掘調査１区において、急斜面から弥生土器片が出土する層を検出した。この層は尾根がくびれた部分のＴ５～Ｔ８にかけて層厚10～35㎝で堆積しており、その層の中から弥生土器片が若干出土した。この層は黒褐色土のやや粘性をもつ層で松ヶ谷遺跡側の尾根部や斜面部では未検出であり、この層の下からは遺構は未検出である。層位は第１層暗褐色土（表土）、第７層淡黄色土（造成土）、第９層黒褐色土（弥生土器片を包含する）、第10層浅黄色土、第11層明黄色礫（地山）である。



第33図　トレンチ配置図



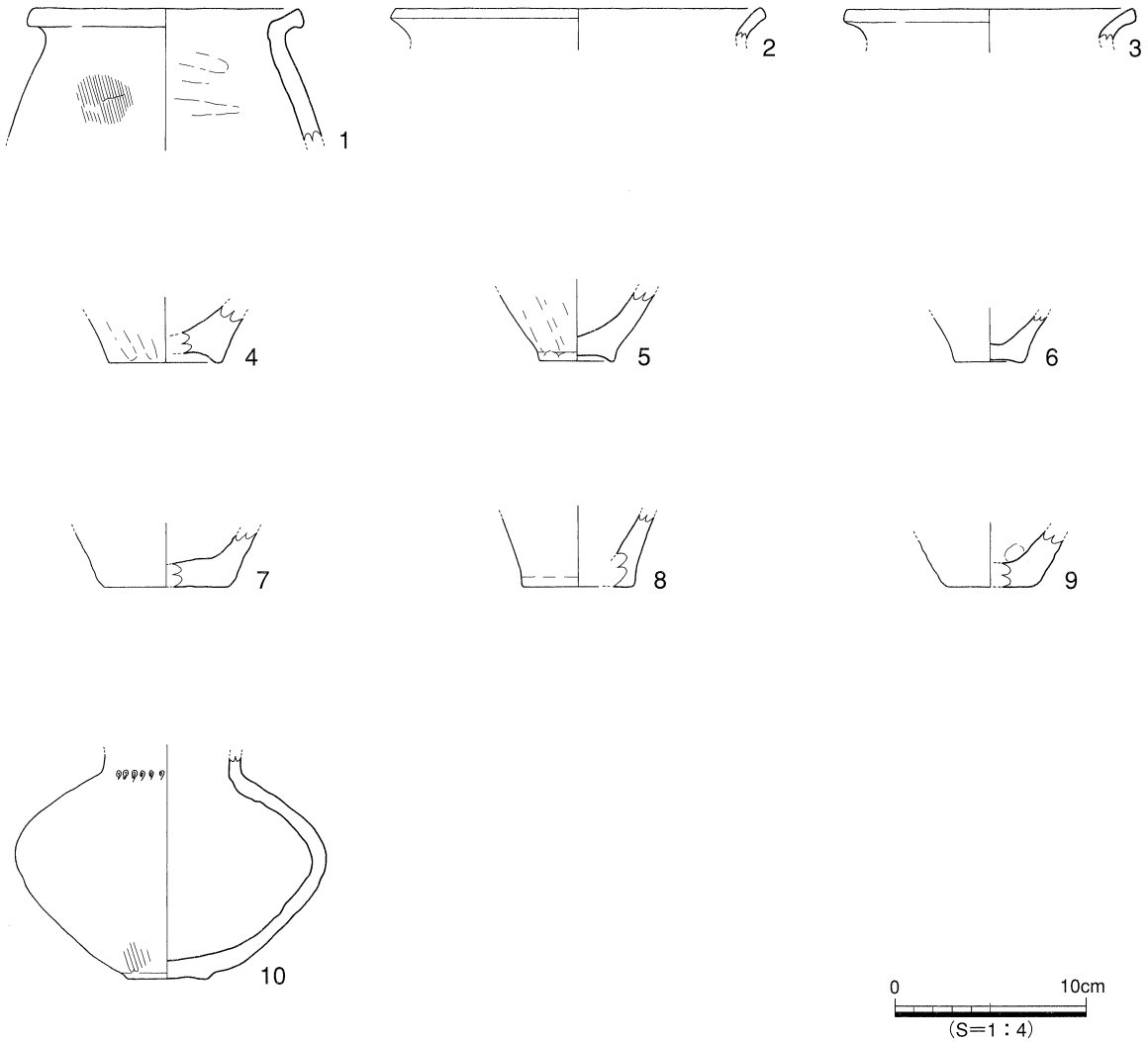
第34図　T5～T8土層断面図

(2) 第９層出土遺物（第35図）

出土した遺物は全て弥生土器であり、器種は甕形土器・壺形土器である。

１～９は甕形土器である。１～３は口縁部である。１は「く」字状の口縁部に端部は下方にやや肥厚される。外面頸部付近に横ナデ、上胴部にハケ目、内面はナデがある。２・３は外反する口縁部に端部は平らな面をなし、内外面に横ナデがある。４～９は底部である。４は上げ底で、内外面にナデがある。５はやや上げ底の底部はくびれ気味で、内外面にナデがある。６は僅かに上げ底の底部をもつ。７～９は平底の底部である。９は内面にナデがある。

10は壺である。やや上げ底の底部に胴部は強く張り出し、肩部に刺突文をもち、頸部は直立気味に立ち上がる。



第35図　第9層出土遺物実測図

(3) 小結

試掘調査地は松ヶ谷遺跡に隣接する西側の傾斜地に位置する。松ヶ谷遺跡では弥生時代後期初頭の竪穴式住居址や土坑を検出し、当該期の集落の存在を窺う資料を検出している。今回の試掘調査で遺物がＴ５～Ｔ８付近の尾根がくびれた急傾斜地に堆積する黒褐色土の埋土中から出土した。黒褐色土の下層は礫の地山であり、地山面での遺構は未検出であった。

松ヶ谷遺跡と同じ尾根上でも竪穴式住居址が検出された地点と比較すると、尾根の幅が狭く遺構の存在の可能性は低く、遺物は松ヶ谷遺跡Ｂ区で出土したものと同時期のものであり、Ｂ区の標高とほぼ同じレベルから下にかけて堆積することから、尾根部にある松ヶ谷遺跡の遺物が、くびれた急傾斜地に流れ込んだものと考えられる。

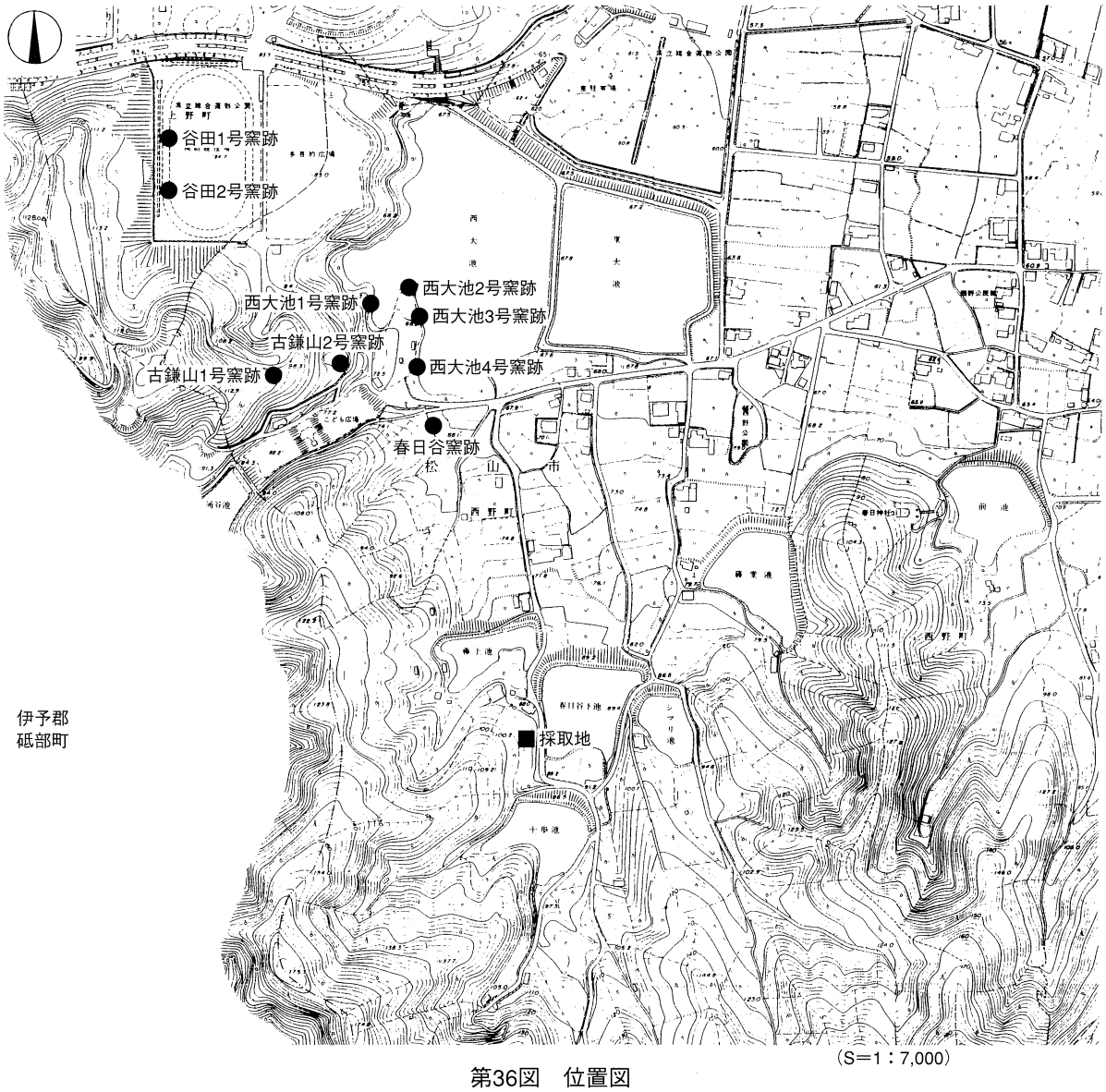
表11　第９層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面	（外面） （内面）			
1	甕	口径（14.0） 残高　7.0	口縁部は「く」字状を呈し、端部はやや下方に肥厚される。	ハケ目	マメツ ナ　デ	浅黄橙色 浅黄橙色	石･長(1～2) ◎		
2	甕	口径（20.0） 残高　1.7	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	砂 石･長(1) ◎		
3	甕	口径（15.4） 残高　1.7	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 （内）褐灰色 にぶい橙色	砂 石(1) ◎		
4	甕	底径（6.0） 残高　3.0	やや上げ底の底部をもつ。	ナ　デ	ナ　デ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石･長(1～3) ◎		
5	甕	底径（4.0） 残高　3.5	やや上げ底の底部はややくびれ、内湾気味に立ち上がる。	ナ　デ	ナ　デ	浅黄橙色 淡黄色	石･長(1～2) ◎		
6	甕	底径（3.6） 残高　2.5	僅かに上げ底の底部をもつ。	マメツ	マメツ	橙　色 にぶい黄橙色	石･長(1～4) ◎		
7	甕	底径（6.6） 残高　2.9	平底の底部。	マメツ	マメツ	橙　色 浅黄橙色	石･長(1～5) ◎		
8	甕	底径（5.8） 残高　3.8	平底の底部。	マメツ	マメツ	橙　色 橙　色	石･長(1～5) ◎		
9	甕	底径（4.6） 残高　3.0	平底の底部。	マメツ	ナ　デ 指頭痕	淡黄色 黄灰色	石･長(1～4) ◎		
10	壺	底径　4.3 残高　11.8	やや上げ底の底部に胴部は強く張り出す。肩部に刺突文をもつ。頸部は直立気味に立ち上がる。	マメツ ハケ目	マメツ	浅黄橙色 灰オリーブ色	石･長(1～3) ◎		

5．西野古墳群内の採取遺物

(1) 概要（第36図）

今回報告する資料は、松山市西野町における松山南部地区農道整備事業が行われる西野古墳群内の西端に位置する丘陵裾部の海抜約94mの果樹園から多数の須恵器が地表面に露出しており、地権者の承諾のもと遺物を採取したものである。当地の北側約330～700mの地点には多数の窯跡が確認されている。また、地権者によると昭和の中頃に当地を開墾する際に斜面部から、多量の須恵器が焼けた土に混じり出土した。遺物は果樹園の東斜面の裾部よりやや上がった位置に多く散乱しており、この地点に窯跡が存在していたという。今回報告する資料は、窯跡群の分布状況を解明する上で貴重な資料である。



(S=1：7,000)

第36図　位置図

(2) 採取遺物

遺構　焼土面の一部を確認し、窯壁片が散布する。

遺物（第37・38図）

今回採取した遺物は全て須恵器であり、器種は坏蓋、坏身、高坏、器台、甕、壺がある。

坏蓋（1～14）1は天井部と口縁部の境に屈曲をもつ。2～5は、口縁部は下方にのび、端部は丸くおさまる。5は口縁端部に焼成後の剥離痕がある。6～8は天井部から口縁部にかけ緩やかにカーブしており、口縁端部は丸くおさまる。9～13はかえりをもつ坏蓋である。9はかえり部が口縁端部より突出し、口縁端部はかえり部から屈曲して下がる。10は口縁端部よりやや突出するかえりがつく。11は口縁端部とかえりの高さはほぼ同じである。12・13は口縁端部よりかえりの方が短い。14は坏蓋と坏身が焼成時の釉により付着した状態のままである。

坏身（15～27）15・16は受部に焼成時における坏蓋の口縁部の貼り付いた痕跡が残る。17・18は内傾する立ち上がり部に焼け歪みがある。19は上方にのびる立ち上がり部に焼け歪みがある。20は上方にのびる立ち上がりと、外方にのびる受部をもつ。21は受部に沈線状の凹みをもつ。22～25は立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。26は立ち上がりはやや内傾し、受部は凹む。27は立ち上がりはやや内傾し、外方にのびる受部に、焼成後の坏蓋の剥離痕がある。

高坏（28～32）28は有蓋高坏で、凹みをもつ受部の外面に1条の沈線が巡る。29は脚部中位に凹みを2条もつ。30は外反する脚裾部に、端部は平らな面をなす。31は外反する脚裾部に端部は下方に肥厚される。32は脚柱部に稜をもち、裾部はラッパ状に広がり、裾部内面に貼り付け凸帯痕が残る。

台付壺（33～35）33～35は脚部で「ハ」字状を呈する。33は脚端部は斜めに面をなす。34は脚端部は平らな面をなす。35は脚端部は内側が接地する。

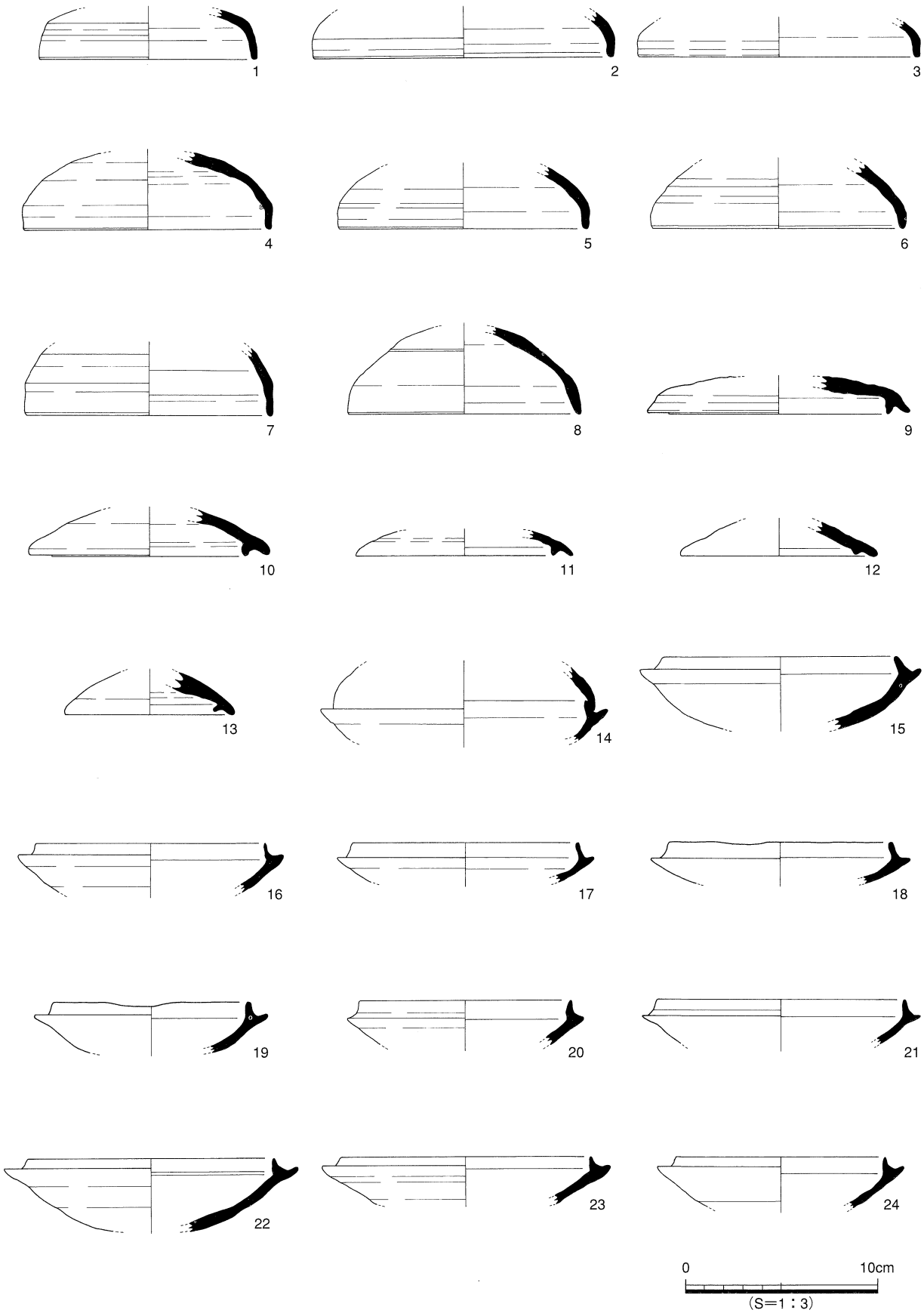
甕（36～40）36は口縁端部がわずかに上方に拡張され波状文が施される。37・38は口縁部は外反し、端部は肥厚され、37は尖り気味、38は丸みをもつ。39は外反する口縁部の内面はやや肥厚される。40は外反する口縁端部に沈線状の凹みをもつ。

鉢（41）内湾する胴部に、口縁部は外反し端部は丸くおさまる。

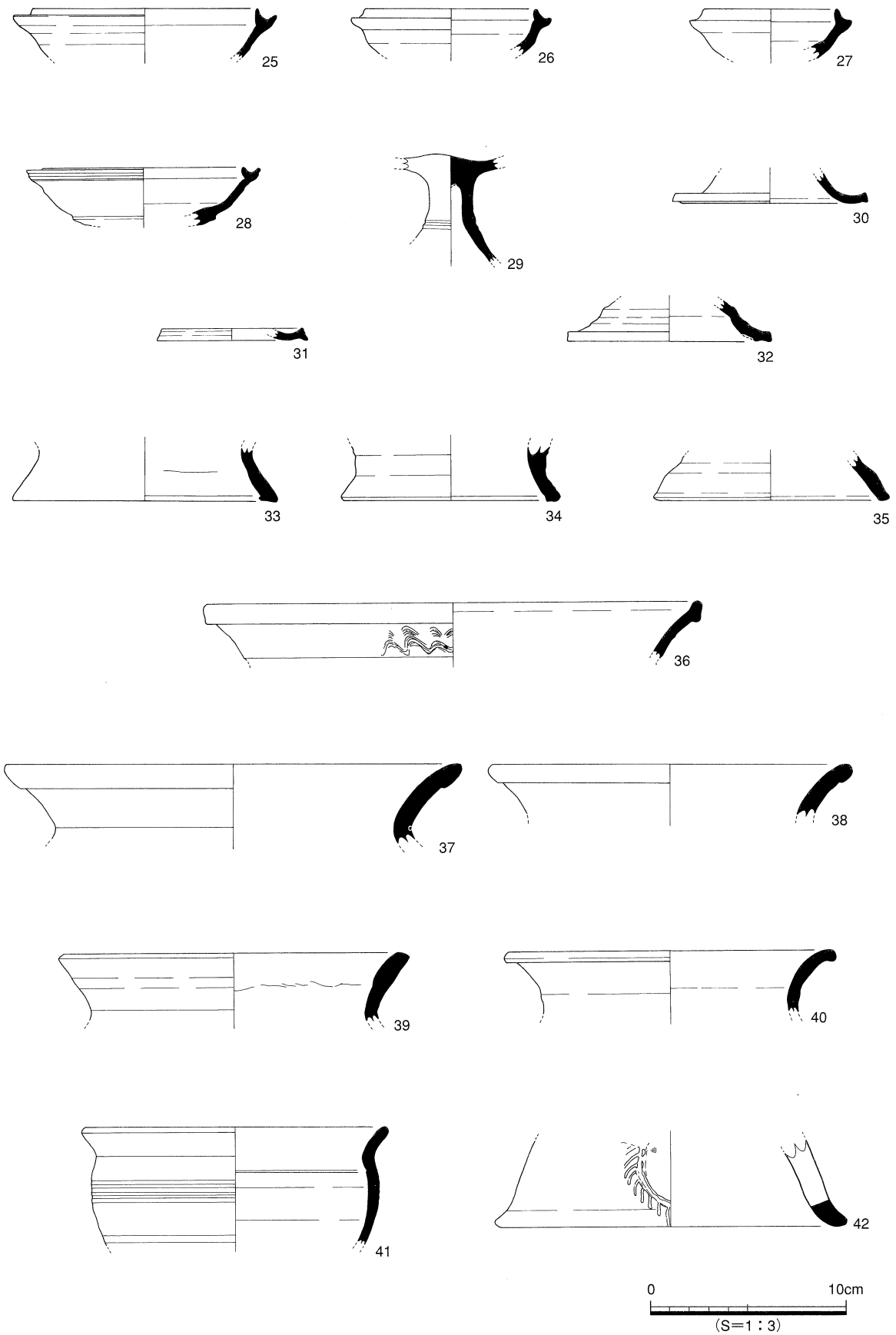
器台（42）「ハ」字状の脚部に裾部はさらに外反し、円孔をもちその円孔の外面に線刻で模様が施される。

(3) 小結

今回遺物を採取した地域は、砥部古窯跡群と呼ばれる須恵器や埴輪を焼成した窯跡が分布している。この砥部古窯跡群は砥部川両岸と御坂川左岸の丘陵裾部に分布する6世紀中葉から8世紀までの窯跡群で、砥部川を遡るほど時代が新しくなる傾向を示している。この中でも当地周辺で検出されている窯跡群は、6世紀中葉から7世紀初頭にかけてのもので、御坂川左岸の一群の中でも最南端となる。今回採取した遺物の中には、坏の蓋と身が焼成時に溶着していたり、焼き歪み品や窯壁片などを多数採取したことから、窯施設の形態や規模・残存状況は未調査のため不明であるが、当地に窯が存在していたことを裏付ける資料である。採取品から6世紀中葉から7世紀初頭にかけて操業していたと考えられる。



第37図　採取遺物実測図（1）



第38図　採取遺物実測図（1）

表12　採取遺物観察表（土製品）

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	坏蓋	口径（11.4） 残高　2.6	天井部と口縁部の境に屈曲をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	長(1) ◎	自然釉	
2	坏蓋	口径（15.8） 残高　2.3	内湾して下がり、口縁部は下方にのび端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 オリーブ灰色	砂 ◎		
3	坏蓋	口径（14.8） 残高　1.8	口縁部は下方にのび、その外面はやや凹み端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 明オリーブ灰色	石・長(1) ◎	自然釉	
4	坏蓋	口径（13.0） 残高　4.0	緩やかにカーブする天井部から口縁部は下方にのび端部は丸くおさまる。	㊐回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1～5) ◎	自然釉	
5	坏蓋	口径（13.2） 残高　3.0	口縁端部に、焼成後の剥離痕がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 明オリーブ灰色	石・長(0.5) ◎	自然釉	
6	坏蓋	口径（13.2） 残高　3.5	天井部から口縁部にかけ緩やかにカーブしており、口縁端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 緑灰色	砂 長(4) ◎		
7	坏蓋	口径（13.0） 残高　3.5	天井部から口縁部にかけ緩やかにカーブしており、口縁端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
8	坏蓋	口径（12.2） 残高　4.5	天井部に調整時にできた凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	石・長(1) ◎	自然釉	
9	坏蓋	口径（13.8） 残高　2.1	内面に口縁端部より突出するかえりがつく。	㊐回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	オリーブ灰色 明オリーブ灰色	石・長(1～2) ◎		
10	坏蓋	口径（12.6） 残高　2.5	内面に口縁端部よりやや突出するかえりがつく。	㊐回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
11	坏蓋	口径（11.4） 残高　1.3	口縁端部と内面のかえりの高さはほぼ同じである。	㊐回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
12	坏蓋	口径（10.4） 残高　1.8	口縁端部より内面のかえりの方が短い。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰色 赤灰色	砂 長(1～2) ◎		
13	坏蓋	口径（8.8） 残高　2.3	口縁端部より内面のかえりの方が短い。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 灰白色	砂 ◎		
14	坏蓋 坏身	受部端部径 （15.0） 残高　3.8	焼成時に釉により、蓋の口縁内面と坏の立ち上がり外面が貼り付いている。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 オリーブ黒色	石・長(1～4) ◎	自然釉	
15	坏身	口径（12.2） 残高　3.8	受部の一部に焼成時における坏蓋の貼り付いた口縁端部片が残る。	ナデ	回転ナデ	暗オリーブ色 灰白色	石・長(1～2) ◎	自然釉	
16	坏身	口径（14.0） 残高　2.5	受部の一部に焼成時における坏蓋の貼り付いた口縁端部片が残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰白色	砂 石・長(1) ◎		
17	坏身	口径（11.8） 残高　2.0	内傾する立ち上がり部に焼け歪みがある。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰　色 灰白色	砂 石・長(1) ◎		
18	坏身	口径（11.6） 残高　2.1	内傾する立ち上がり部に焼け歪みがある。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰　色 灰白色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
19	坏身	口径（10.2） 残高　2.6	上方にのびる立ち上がり部に焼け歪みがある。	ヨコナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰　色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
20	坏身	口径（11.0） 残高　2.3	立ち上がりは上方に、受部は外方にのびる。	回転ナデ	ナデ	灰　色 灰オリーブ色	砂 ◎	自然釉	
21	坏身	口径（13.0） 残高　2.3	受部は沈線状の凹みをもつ。	マメツ	回転ナデ	灰白色 明褐灰色	砂 石・長(1) ◎		

採取遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調 (外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
22	坏身	口径（13.0） 残高　3.8	立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラ削り	回転ナデ	灰　色 オリーブ灰色	砂 石・長(1) ◎		
23	坏身	口径（13.0） 残高　2.4	立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。	マメツ	回転ナデ	灰　色 灰白色	石・長(1) ◎		
24	坏身	口径（11.0） 残高　2.6	立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。	ナデ	ナデ	灰白色 灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	石・長(1～2) ◎	自然釉	
25	坏身	口径（11.6） 残高　2.5	立ち上がりは上方にのび、受部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	砂 長(1～2) ◎		
26	坏身	口径（8.8） 残高　2.3	立ち上がりはやや内傾し、受部はやや凹む。	ヨコナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰白色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
27	坏身	口径（6.6） 残高　2.5	立ち上がりはやや内傾し、外方にのびる受部に、焼成後の坏蓋の剥離痕がある。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラ削り	回転ナデ	浅黄色 灰白色	砂 ◎		
28	有蓋 高坏	口径（10.2） 残高　2.9	凹みをもつ受部の外面に沈線が1条巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	極暗赤褐色 にぶい赤褐色	砂 石・長(0.5) ◎		
29	高坏	残高　5.5	脚部中位に凹みが2条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰　色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
30	高坏	残高　1.5	外反する脚裾部に、端部は平らな面をなす。	ナデ	ヨコナデ	灰　色 灰白色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
31	高坏	残高　0.6	外反する脚裾部に、端部は下方に肥厚される。	回転ナデ 沈線	回転ナデ	灰　色 灰　色	砂 石・長(1) ◎		
32	高杯	底径（10.5） 残高　2.3	脚柱部に稜をもち、裾部はラッパ状に広がり、裾部内面に貼り付け凸帯痕が残る。	ヨコナデ	ヨコナデ	紫灰色 灰白色	石・長(1) ◎	自然釉	
33	台付壺	口径（13.6） 残高　2.6	「ハ」字状を呈する脚端部は斜めに面をなす。	ナデ	ヨコナデ	灰オリーブ色 オリーブ黒色	石・長(1～2) ◎		
34	台付壺	口径（11.2） 残高　2.8	「ハ」字状を呈する脚端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 灰　色	砂 石・長(1～2) ◎		
35	台付壺	底径（12.2） 残高　2.3	「ハ」字状を呈する脚部の内端面が接地する。	ナデ	ヨコナデ	暗灰色 紫黒色	石・長(1～2) ◎		
36	甕	口径（25.6） 残高　3.0	外反する口縁部の端部はわずかに上方に拡張される。外面に波状文を施す。	ナデ	ヨコナデ	灰　色 灰白色	砂 長(1) ◎	自然釉	
37	甕	口径（23.4） 残高　3.9	外反する口縁部の端部は肥厚され尖り気味である。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰　色 灰　色	砂 石・長(1) ◎	自然釉	
38	甕	口径（18.8） 残高　2.5	外反する口縁部の端部は肥厚され丸味をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰　色 灰白色	砂 石・長(1) ◎		
39	甕	口径（18.0） 残高　4.4	外反する口縁部の内面はやや肥厚される。	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1) ◎		
40	甕	口径（17.0） 残高　3.3	外反する口縁端部に沈線状の凹みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 オリーブ灰色	砂 ◎		
41	鉢	口径（15.4） 残高　6.1	内湾する胴部に口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。	㊐ヨコナデ ㊟櫛描き紋 ナデ	㊐ヨコナデ	明オリーブ灰色 灰　色	砂 石・長(1) ◎		
42	器台	底径（18.2） 残高　4.4	「ハ」字状の脚部に裾部はさらに外反し、円孔をもつ。円孔外面には線刻の模様が施される。	ナデ	ヨコナデ	灰オリーブ色 灰白色	石・長(1～4) ◎	自然釉	

6．まとめ

弥生時代中期から西日本の瀬戸内海沿岸を中心とする地域に集中して発生する高地性遺跡は、一般的には軍事的な様相を呈するものと考えられている。本遺跡の北西にある丘陵上の標高約100mに位置する釈迦面山遺跡は、平野を見下ろす様に立地し、弥生時代中期後葉から後期中葉までの竪穴式住居址や掘立柱建物址を伴う集落であり、高地性遺跡と考えられている。本遺跡は、この釈迦面山遺跡よりも30m程高く、釈迦面山遺跡を一望することができ、双方の集落は同時期に存在していることなどから、集落のつながりについても検討の余地がある。また、本遺跡で検出された遺構や出土した遺物などは、低地性遺跡のものと相違性はみられず、本遺跡は直下の平野部に広がる集落の一員として構成され、松山平野や伊予灘が一望できる眺望性に優れた条件が、立地の最大要因となり、見張りや通信的な役割を担っていたことも考えられる。

本遺跡と周辺の尾根部には、松ヶ谷古墳群として12基の古墳の存在が分布調査により確認されている。このなかでも松ヶ谷１号墳は、本格調査により６世紀末の両袖を伴う横穴式石室構造をもつ古墳であることが判っている。分布調査で松ヶ谷８号墳が本遺跡の西隣で確認されているが、西野町側の試掘調査では未検出であった。しかし、本遺跡の試掘調査の段階で、８号墳推定地の周辺部において、盛り土の残存と考えられる固められた土の痕跡を地山直上で僅かに検出した。そして、申請地の谷部で見つかった積石などから、松ヶ谷８号墳は、果樹園開墾の際に取り壊されたものと考えられる。また、西隣の尾根部にある松ヶ谷２号墳・３号墳の遺存は良くないが、残存状況から横穴式石室構造が想定でき、松ヶ谷古墳群における古墳の構造を解明する上での貴重な資料となる。

表採資料を採取した地点は砥部古窯跡群内に位置し、周辺の西野町では窯跡が９基調査されている。地表面の状況だけでは窯の詳しい構造は不明であるが、丘陵裾部の斜面上に構築された窯であり、西大池を中心とする平野部に接した窯跡群とは別に、谷部付近に展開する窯跡群が存在する可能性が考えられる。

今後の周辺調査では、今回検出した溝と南隣に位置する松ヶ谷９号墳とのつながりや、松山平野や伊予灘の島々も眼下に俯瞰できる眺望の豊かな場所に立地する集落の広がりや、周辺地域での丘陵上から平野部にかけて展開する集落との関連性などを検討する必要がある。

【参考文献】

森　光晴　1975　「かいなご・松ヶ谷古墳群」　松山市教育委員会
岡田　敏彦　1979　『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』　愛媛県教育委員会
長井　数秋・岡田　敏彦　1981　「古鎌山古墳」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　愛媛県教育委員会
西川　真美・平田　慶子　1988　「西野春日谷遺跡　通谷池２号墳」『えひめ子供の城建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
阪本　安光　1991　「大下田古墳群・釈迦面山遺跡群・谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡（谷田１号・２号窯跡）」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　愛媛県教育委員会
栗田　茂敏　1994　「上野遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告書　第39集』　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松　山　市　1992　『松山市史　第一巻　原始編』　松山市史編集委員会
愛　媛　県　1991　『愛媛県内古墳－分布調査報告書－』　愛媛県教育委員会　芸術・文化財室
1986　「上野遺跡（谷田Ⅱ遺跡）」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会
1986　「土壇原遺跡群」『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県史編纂委員会

写真図版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。

使用機材：

カメラ　トヨフィールド45A　レンズ　スーパーアンギュロン　90㎜他
アサヒペンタックス67　ペンタックス67　55㎜他
ニコンニューFM2　ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム　白　黒　プラスXパン・ネオパンSS・アクロス
カラー　エクタクロームEPP・RDPⅢ・フジカラー100

2．遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ　トヨビュー45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ　ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ　コメット CA32・CB2400
スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　白黒　プラスXパン・ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けているが、一部はカラー紙焼きを印刷原稿とした。

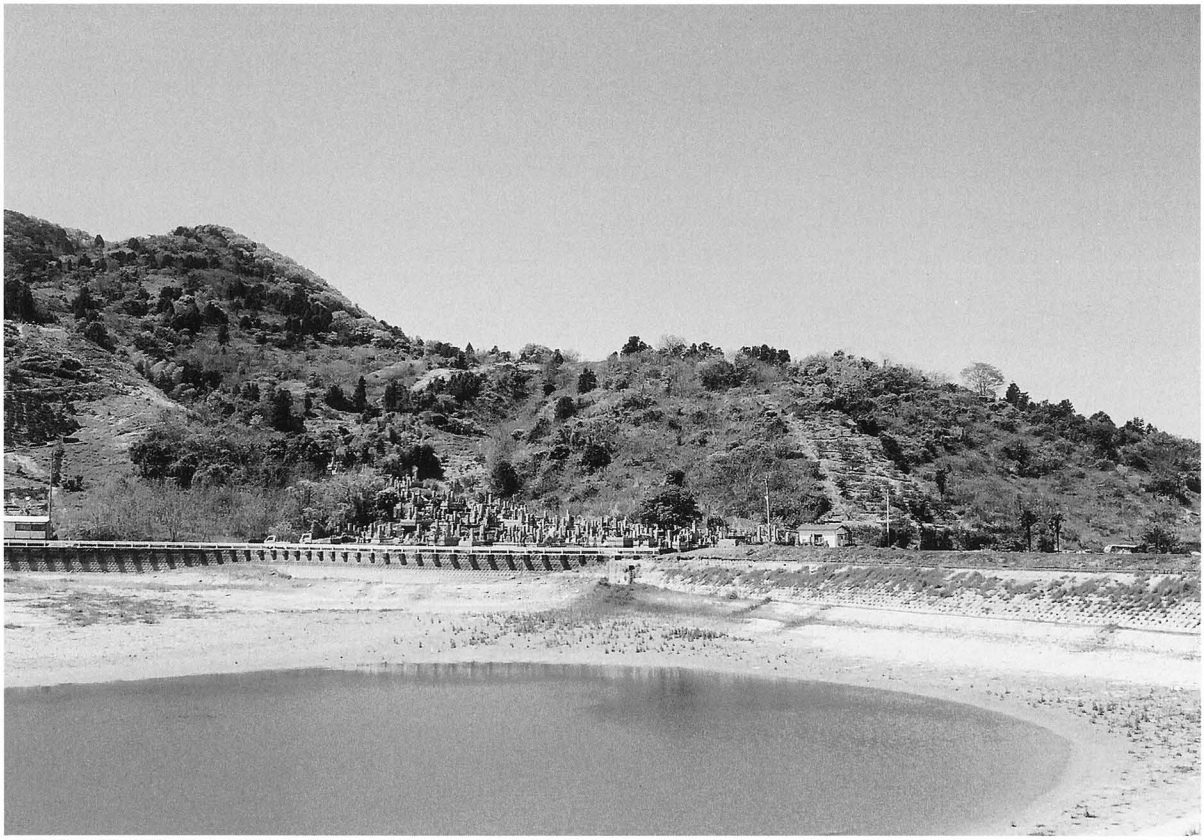
使用機材：

引伸機　ラッキー450MD・90MS
レンズ　エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙　イルフォードマルチグレードⅣ RC

4．製版　写真図版175線
印刷　オフセット印刷
用紙　マットコート135kg
製本　アジロ綴

【参考】『埋文写真研究』vol.1～13　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］



1．調査地遠景（北東より）

2．調査地全景（南より）

図版二

1．調査地全景（北より）

2．作業状況（北より）

1．A区遺構検出状況（南より）

2．A区遺構検出状況（北より）

図版四

1．A区SD１南壁土層（北より）

2．A区台石出土状況（東より）

1．A区遺構完掘状況（北より）

2．A区遺構完掘状況（南より）

図版六

1．B区遺構検出状況（南より）

2．B区SK４検出状況（東より）

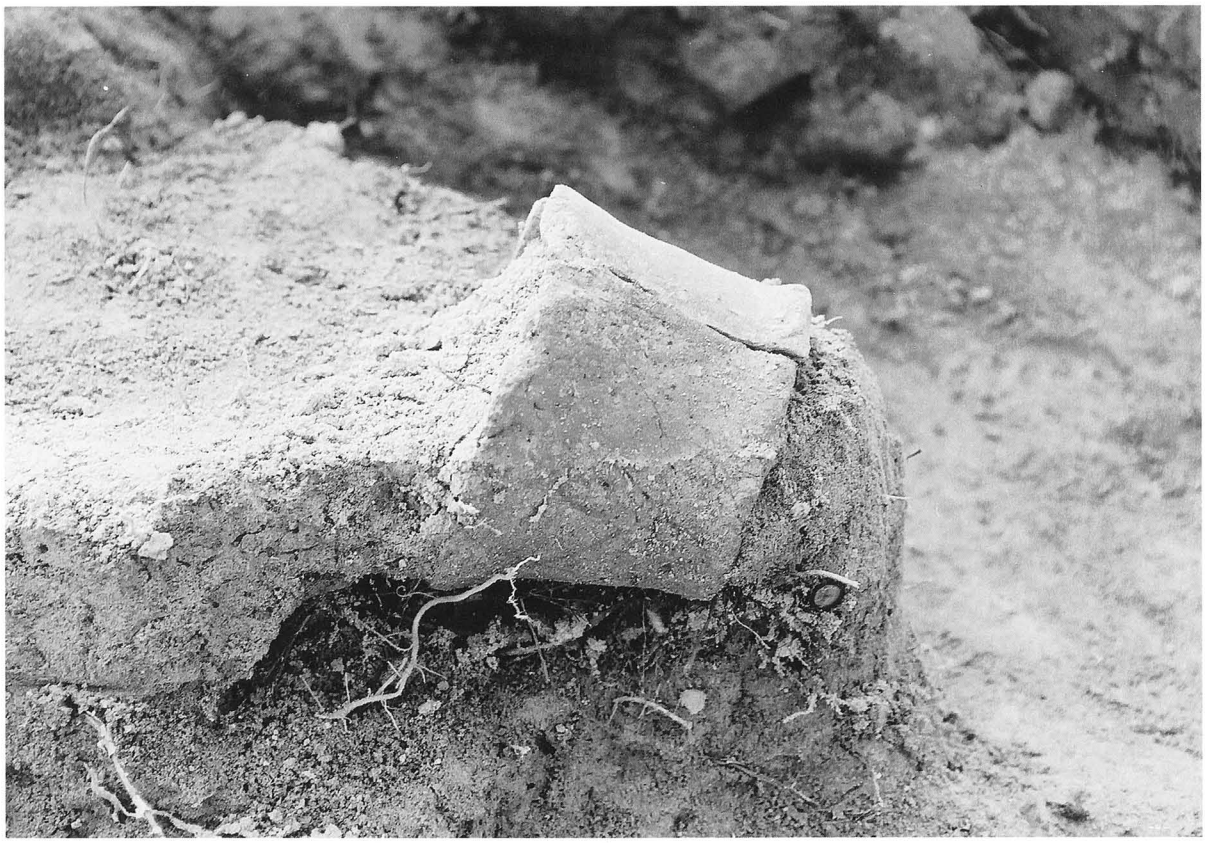
1．B区SK１・６検出状況（東より）

2．B区SB１検出状況（西より）

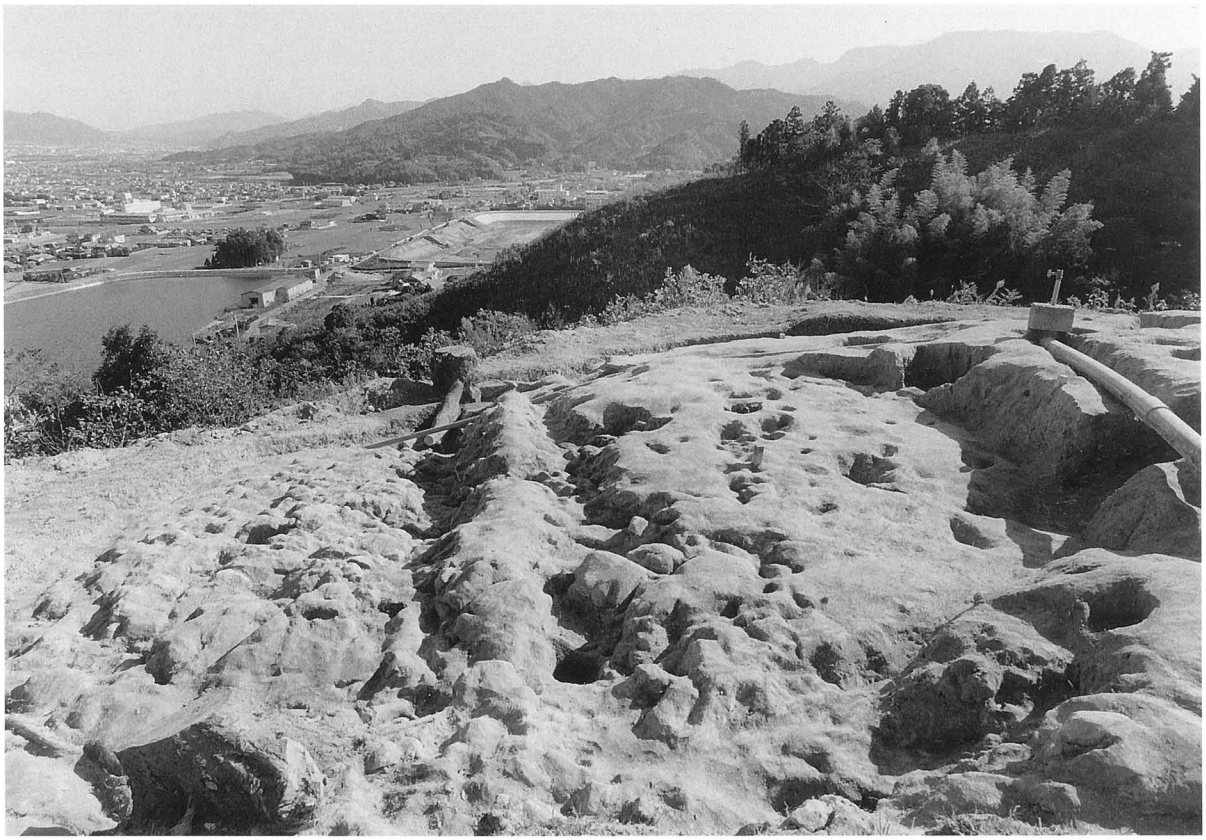
図版八

1．B区SB１ベルト土層（北より）

2．B区SB１焼土・炭検出状況（北西より）



1．B区SB１遺物出土状況（東より）

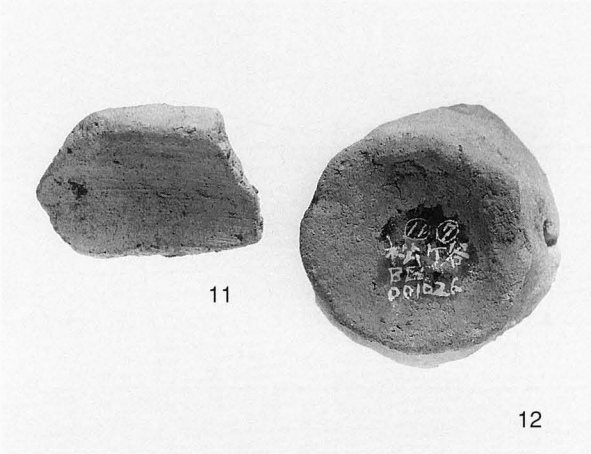


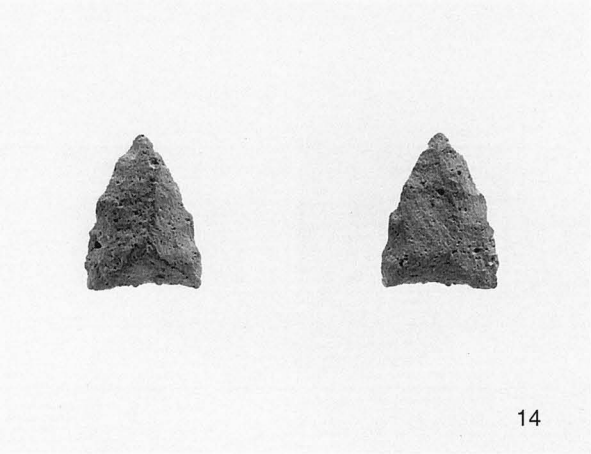
2．B区SB１完掘状況（西より）

1．B区SB１完掘状況（東より）

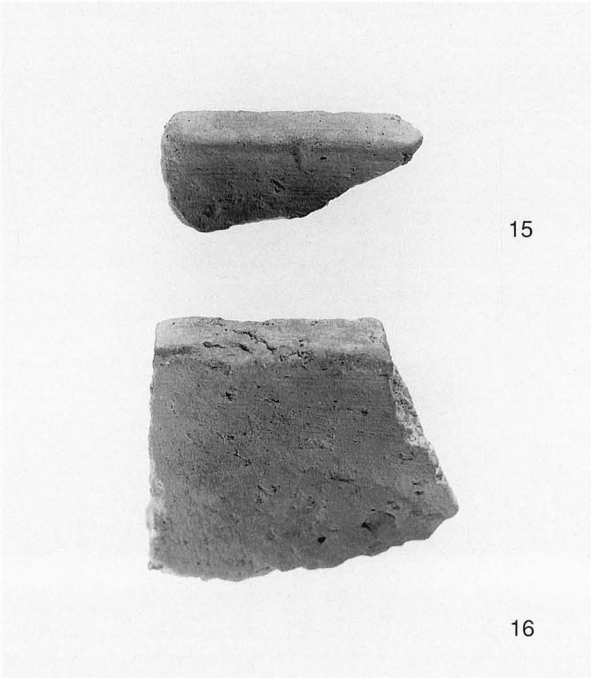
2．調査地全景（東より）

1．A区第Ⅳ層出土遺物

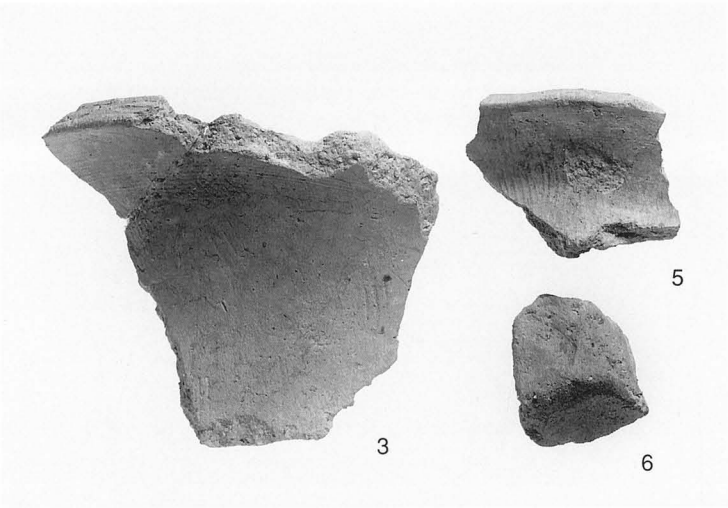




2．B区第Ⅳ層出土遺物



3．B区第Ⅰ層出土遺物



1．B区SB１出土遺物

1．松ヶ谷古墳群の遠景（北西より）

2．松ヶ谷古墳群内A地点の石（北より）

1．松ヶ谷古墳群内A地点の石（北西より）

2．松ヶ谷古墳群内B地点の石（南西より）

1．松ヶ谷古墳群内C地点の石（北より）

2．松ヶ谷古墳群内C地点の石（南西より）

1．須恵器の採取地（北東より）

2．表採遺物（東より）

報告書抄録

ふりがな	まつがたにいせき
書名	松ヶ谷遺跡
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第89集
編著者名	河野史知・加島次郎・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL 089-948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦　2003年3月7日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつがたにいせき 松ヶ谷遺跡	まつやましえばちょう 松山市恵原町	38201		33°45′25″	132°48′32″	20001010～ 20001208	4,623m² のうち 1,036m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ケ谷遺跡	集落	弥生時代	竪穴式住居址 土坑、柱穴	弥生土器、石器	高地性遺跡

松山市文化財調査報告書　第89集

松ヶ谷遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業松山南部地区農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成15年３月７日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１
ＴＥＬ(089)９４８－６６０５

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ(089)９２３－６３６３

印刷　原印刷株式会社
〒790-0056　松山市土居田町３９６－６
ＴＥＬ(089)９７４－８７１１